



38号

Anchor

アンカー 2006年12月



イエスを見失ったSDA?

見ざる、聞かざる、言わざる大真理

「それは彼らが、見ても見ず、聞いても聞かず、また悟らないからである。」 マタイ 13:13

神の居住地—宣教師のさんさんの試練

証—翻って生きよ

終末時代のパワーとしてイスラムは登場するだろうか?

預言されているだろうか?

クリスマスは 12 月 25 日ではない

～異教、カトリック教会からの遺産～



「率直に言って、セブンスデー・アドベンチスト教会が、どうして今日一般に行われているクリスマスイブの集会を取り入れているか、理解しがたい」と元アンドリュース大学教授、バキオキ博士は言う。

彼は 1960 年頃までは、セブンスデー・アドベンチスト教会でクリスマスツリーを飾って祝うという習慣は見られなかったと…。

「クリスマス」という言葉は聖書にない。それはキリストの誕生を祝うというカトリックの「Christ + Mass、キリスト+ミサ」から来ているのである。冬至の後に太陽が戻ってくるのを祝う異教の祝日をカトリックはキリストの誕生にあてて、ちょうど日曜日と同じように世界に普及させたのである。キリストの誕生を祝うことについては新約聖書に一切出ていない。むしろ聖書は、キリストの受難と十字架に多く集中している。

クリスマスは、12 月 25 日でなく、9 月/10 月であったという証拠:

- 1.キリストの公生涯が約 30 歳の時にはじまった(ルカ 3:23)。それから 3 年半経って過ぎ越しの祭りの時(3 月から 4 月)に死なれた。そこから遡ると 12 月 25 日でなく、9 月/10 月にあたる。
- 2.また、11 月から 2 月にかけて羊飼いたちは野宿して羊を見守ることはしなかった。「羊のおり」に入れて守ったのである。だから、12 月 25 日にイエスが誕生したことは考えられない。
- 3.キリストの誕生は、9 月の終りか 10 月の初めにかけての仮庵の祭の時であることが妥当である。この祭はユダヤ人にとって年の最後の最も重要な祭であった。ローマによる人口調査の時であり、巡礼者がいっばいで宿が見つからないほどであった。

た。

4. 仮庵の祭との関係

仮庵の祭の時には、ユダヤ人たちは仮小屋を作って野宿するのがモーセによって教えられていて、彼らにとって重要な行事であった。英語で「Feast of Tabernacles」と言う。「Tabernacle」というのは、宿するという意味である。ヨハネ 1:14 にこう書いてある:

「言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った」と。

仮庵の祭はイエスの受肉によって初臨なさったことと再臨によって永遠に「神の幕屋が人と共にあり、神が人と共に住」(ヨハネ 22:3,4)むことの両方を指し示したようである。

5. 「アビヤの組の祭司で名をザカリヤという者がいた」ルカ 1:5。

歴代上 24 章に神殿(聖所)における祭司の奉仕が詳細に書かれている。その前の 23 章にはアロンの子孫が祭司の務めをすることが定まっていた。アロンの 4 人の息子のうち 2 人の息子は早く死んで子孫がいなかった。残った 2 人の子のエレアザルには、16 人の子孫、イタマルには子孫が 8 人いて合計 24 人で神殿の祭司の務めをすることになった。24 組が毎年くじによって月に 2 人ずつ割り当てられた(24:18)。アビヤは「第八」にあたっていた(24:10)。

ユダヤの暦には宗教暦と市民暦の二つがあった。宗教暦はニサンの月から始まり、市民暦は、ニサンの 7 ヶ月後のチスリの月から始まった。ニサンの月の 14 日が過ぎ越しの祭となる。アビヤは第 4 の月の後半に割り当てられていた。

		ユダヤの暦		グレゴリオ暦
1.	ザカリヤの務め(ルカ 1:5) 天使が訪れる(8-10)	4 月	タンムズ	6 月-7 月
2.	務めの後、ザカリヤ家に帰る(23)	5 月	アブ	7 月-8 月
3.	6 ヶ月後、マリヤ身ごもる(26)	10 月	テベテ	12 月-1 月
4.	3 ヶ月後、バプテスマのヨハネ誕生	第 13 月/翌年の第 1 の月	ニサン	3 月-4 月
5.	6 ヶ月後、イエスの誕生	第 19 月/翌年の第 7 月	チスリ	9 月-10 月

以上の考察からキリストの誕生は、9 月の終りか 10 月の初めにかけての仮庵の祭の時であることがわかるであろう。

韓国史上最大の大惨事！

韓国^{サンブン}三豊百貨店の大崩壊から学ぶ！



先日の『アンビリバボー』（フジTV）で、1995年、韓国史上最大の大惨事となった、巨大百貨店（三豊百貨店）の大崩壊について取り上げていた。

1995年1月17日の阪神大地震の死者5400人に比べるとずっと少ないが、韓国では大惨事であったのだ。

1996年6月29日、営業中（午後5時55分、現地時間、日本時間同）に突然5階建ての建物の半分が崩壊し、死者502名・負傷者937名・行方不明者5名という例の無い大惨事が起こった。



11年の月日を費やして、ようやくその原因がわかってきたらしい。工事の途中で、施工者が宇成建設から百貨店の経営母体である三豊建設産業に変更されたこと、元々、このビルは地上4階、地下4階建てのオフィスビルとなる予定だったが、5階建てのデパートに変更するために、基礎工事が終わった段階で建設会社に変更されたこと、売り場に防火シャッターを設置するためビル中央部の柱の一部を取り除いた結果、ビル自体が構造的に弱くなったこと、事故が起こる前年の1994年には当局に無断で地下に売り場を増設する工事を行い、これが更に建物の強度を弱めたこと、屋上に大型冷房装置を移動させたため、上記の強度不足が原因となって屋上が装置の重量に耐え切れなかったこと、元々梁を使用するが、重量制限のある柱で建物を支える建築工法を取ったこと、レストランは床に座る方式のため、床暖房を入れ、床部分を底上げした分重量が増えたこと、…等々。

崩壊前日に5階の従業員が天井（屋上）のひび割れに気づいており、崩壊当日の朝にはひび割れが大きくなっていったため、すぐに上司に報告した。午前9時の段階で経営陣が集まり緊急会議を開いたが、その間も営業は続行していた。午後3時に社長が呼んだ建築士が到着して調査し、危険を察知して警告したにもかかわらず、経営陣は「まもなく閉店だから」という理由で営業を続行した。崩壊当日も、大惨事を回避するチャンスはいくつもあった。亀裂などの状況を察知した建築士が「店を閉鎖した方がいい」と忠告したという。しかし会長は「閉鎖で生じる損害を弁償してくれるのかね？」と聞き入れなかった。建築士はクビを恐れ、それ以上は言えなかったそうだ。

こうして、1995年6月29日午後5時55分、巨大百貨店は一瞬のうちに崩壊した。大変な人的経済的損害が生じた。

1. このような惨事が世界的に続発している。来るべき決定的な事件が近づいていることは「人間を危機感に目覚めさせる方法の一つである」（クリスチャンの奉仕 71）。これは神の愛の警告である。クリスチャンの奉仕の「クリスチャンの働き



人が直面している世界情勢」という章に現代頻繁に起こっている事件、現象の真の意味が書かれているのでぜひ読んでいただきたい。

- 最初は**小さい**ひびから、**亀裂**、**崩壊**へとだんだんと警告が大きくなっていく。しかし、人は「のどもと過ぎれば熱さ忘れる」という習性があるようである。
- 偽りの指導者に従うことの危険。

「サタンはいつも、神の代わりに人間に注意を向けさせようと努力している。彼は、人々が自分で聖書を探って自分の義務を学ばないで、監督や牧師や神学者を案内者とするように導く。そうする時に、サタンはこれらの指導者たちの心を支配することによって、大衆を意のままに感化することができるのである」大争闘下 361。

「彼らは、手軽にわたしの民の傷をいやし、平安がないのに『平安、平安』と言っている」エレミヤ 6:14。

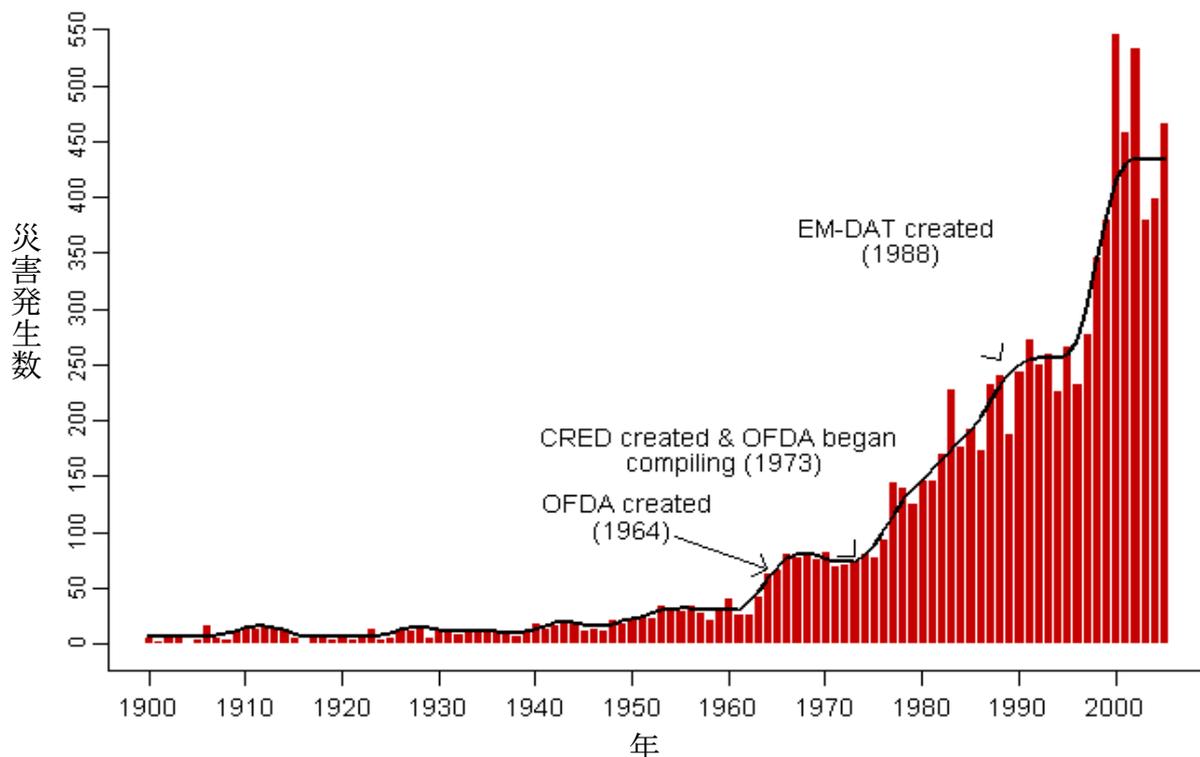
「ああ、主なる神よ、預言者たちはこの民に向かい、『あなたがたは、つるぎを見ることはない。ききんもこない。わたしはこの所に確かな平安をあなたがたに与える』と言っています」エレミヤ 14:13。

- 救助員は阪神大地震から教訓を学んで瓦礫の山を駆け巡って声をかけ探し回った。事故後、11 日目、13 日目、17 日目を経て常識では考えられない、奇跡の生還が次々あって世界中を沸き立たせた。

崩壊後 17 日目には、パク・スンヒョンさん救出。377 時間ぶりの奇跡の生還。彼女もまた、救助隊員の存在に気付き、最後の力を振り絞って、鉄パイプでドラム缶を叩き続けた結果、発見された。あきらめない態度に感動した。又、救助員の献身ぶりに学びたいものである。

ガン患者が医者から余命 1 ヶ月と宣告されたにもかかわらず治った人がいるのを見聞きしたり、また、救霊の働きにおいて、ぎりぎりのときに改心することがあるのを見聞きすると、人は息のある間、決してあきらめてはならないものだと思われた。

Natural disasters reported 自然災害報告





イエスを見失ったか、再臨信徒よ！

見ざる、聞かざる、言わざる 大真理

「キリスト教会は、みな十字架を説く。信仰による義も説く。安息日を守る教会もある。キリスト教のエッセンスは愛である。他の教会の方が愛と喜びに満ちあふれている。明るい。暖かい。キリスト教会はみな仲間なのだ。ローマ・カトリックはもう変わったのだ。セブンスデー・アドベンチストも変わってきたのだ。しいてセブンスデー・アドベンチストでなくても救われるのではないか？」という声が聞かれる。

ある牧師が調査審判について説教したそうだ。すると終わってから、たまたまその教会に来ておられた指導者に「そういう説教はしない方がいいよ、福音を説くように」と注意されたそうだ。ある教会で、教課研究の時(ちょうど聖所の研究であった)、若い牧師が「私はそのことは良く知りませんので、みんなで賛美歌を歌いましょう」と言って教課研究はそっちのけにしたそうだ。また、家庭訪問をした牧師が机の上に広げてあった「各時代の争闘」の本を見て「こんな本を読んでいるんですか。150年も前に書かれた本ばかり読んでいるとあなたの頭も古くなりますよ」と言われたそうだ。その信徒は「では聖書ばかり読んでいると、もっと頭が古くなりますね」と言いたかったけれども口に出せなかったとか。……



再臨の切迫、日曜休業令、罪の除去、罪なき完全な品性、聖所の清め、ローマ・カトリックの世界支配陰謀、その危険な戦略、バビロンとなった他教会、調査審判、律法遵守、イエスの証=預言の霊について今はあまり聞かないと古い信者は嘆く。そんな話は聞いたことがないと新しい信者からの声。SDA 嘆きの壁が築かれたのだろうか。

かつて主を迎えることに熱心だった再臨信徒にも、我が教会の柱石について『見ざる、聞かざる、言わざる』シンドロム(症候群)が現れたのだろうか。アドベンチスト焦燥の本当の原因を追求してみたい。

1 至聖所にイエスを見い出して 誕生したセブンスデー・アドベンチスト

セブンスデー・アドベンチストは、1844年に主イエスを至聖所に見出して誕生した。1844年10月22日にキリストの再臨を期待したが、実現しなかったので「大失望」を経験した。黙示録10章に預言されていた通りである。しかし、その大失望の後、彼らは断食と祈りと預言の研究によって主イエスを天の至聖所に見出した。どんなにか喜びと確信と希望に満たされたことであろう。

「今彼らは、至聖所の中に、再び主を見た。それは、彼らの憐れみに満ちた大祭司であり、まもなく彼らの王として、救出者として来られる方であった。聖所からの光が、過去と現在と未来を照らした。彼らは、神が、誤ることのない摂理によって自分たちを導いてこられたことを知った。彼らは、最初の弟子たちと同様に、自分たちが伝えた使命を理解できなかったのであったが、しかしその使命は、あらゆる点において、正しかったのであった。それを宣言することにおいて、彼らは神のみ心を成し遂げたのであって、彼らの労苦は主にあってむだではなかった。彼らは、新たに生まれて、『生ける望みをいだかせ』られ、『言葉につくせない、輝きにみちた喜びに』あふれたのである」 大争闘下 138,139。

「わたしは、第三の天使が、上の方を指さして、失望した人々に、天の聖所の至聖所への道を示しているのを見た。信仰によって彼らが至聖所に入る時に、彼らはイエスを見出して、新たな希望と喜びを味わうのである。わたしは、彼らが、過去を振りかえって、イエスの再臨の宣言から1844年における時の経過に至るまでの、彼らの経験を回顧しているのを見た。彼らは、彼らの失望が解き明かされて、ふたたび喜びと確信に活気づけられた。第三の天使は、過去と現在と未来を照らした。そして、彼らは、神が不思議な摂理によって、彼らを導いてこられたことを知るのであった」 初代文集 415。

そして、彼らは「もう一度、多くの民族、国民、国語、王たちについて、預言せねばならない」(黙示録 10:11)と言う声に従って全世界へと宣教に立ち上がったのであった。

2 見ざる、聞かざる、言わざる「至聖所の最後の贖い」

しかし、教会は再びイエスを見失ってしまう。大失望の後、至聖所に最後のあがないをなされる大祭司としてのイエス、ご自分の花嫁である教会と結婚するための花婿イエスを見出してあれほど喜んだ教会は、なぜイエスを見失ったのか。彼らは、至聖所の契約の箱の中に十戒が収められているのを見た。十戒の特に安息日に注目した。日曜日を主の日としてきた伝統のおろかさから脱し、「破れを繕う者」という役割を認識し、聖書の安息日を高く掲げた。裁きの時に住んでいるという自覚のもとに律法を完全に守らなければ調査審判に合格しない、主を迎えることはできないと考え、律法を説くこと、セブンスデー・アドベンチストの教理を擁護することに汲々とした。

ちょうど、イスラエルの民が、シナイ山のふもとで恐れあまり、十戒を守り行きますと三回も誓ったことと同じであった。神は、イスラエルが自分たちの力で律法を守ることができないことはよくご存知であった。それで信仰による義を教えるために聖所を作らせたのであった。「贖罪の犠牲と全能の仲保の働き」という福音が聖所の儀式にぎっしり詰まっていた。しかし、イスラエルは、なかなか神のレッスンを学べず、律法主義に陥ってしまった。

1852年には早くもラオデキヤ状態になったと預言者は指摘している。1863年にはセブンスデー・アドベンチスト教会という組織ができる。しかし、律法主義はますます固まってしまう。教会は、律法、律法を強調し、「ギルボアの丘に露も雨も降らず」からからになってしまった。

1888年、神は教会を癒すために、ミネアポリス世界総会で、人間の唇から聞いたことのない「尊い真理」を、ジョーンズとワゴナーを通して与えられた。それは、後の雨—大いなる叫びをもたらし、義をもって速やかにみ業を終わらせるはずのメッセージであった。1888年のメッセージのエッセンスは、人は「Nothingness」、つまり「無」であり、イエスが「Everything」、つまり「すべて」である、「人にはできないが、神にはできないことはない」ということであった。ただ信仰によってのみ義とされる。ただし、義とする信仰は「無から有を呼び出される神を信じる」信仰であり、「望み得ないのに望みつつ信じる」信仰である。義、完全に至らせる信仰は「イエスの信仰」であると強調したのであった。彼らの説いた信仰はアブラハムの、そしてイエスのダイナミックな、生きた信仰であった。

わが教会は、その尊いメッセージを拒んだ。わが教会は、イスラエルがカデシ・バルネアでヨシュアとカレブのメッセージを拒んで40年間荒野をさまようことになった同じ轍を踏むことになった。チャンスを逸したのであった。1888年の後に預言者は、「かつてない深い背教に陥った」と嘆いた。

預言者は、1895年に「多くの者は、イエスを見失った」と指摘している(TM 91,92 1895)。

その結果、「セブンスデー・アドベンチストのアイデンティティー(独自性)喪失の危機」「アドベンチストの焦燥」などと嘆きの叫びが聞かれるようになった。古代イスラエルは周囲の国々を見て、その習慣を取り入れて妥協した。現代イスラエルも世俗を見て、「ほとんど同じ見方で物事を見るように」なってきた(大争闘下 378 参照)。

我々の先駆者たちが得意としたこの主題について、その考え方、提示の仕方が以前は成熟していなかったとは

言え、よく語られた時代があった。しかし、今日の教会はどうであろうか？

3 結婚式場(至聖所)に花婿を見失った SDA の焦燥

セブンスデー・アドベンチストが見失ってはならない二つのことがある。一つは、天におられる大祭司イエスであり、もう一つは、この地上の大祭司、「獣」、「バビロンの母」、「大淫婦」と「その娘たち」「偽預言者」として「心霊術」の働きである。わが教会は、最後のサタンの大欺瞞について世の人々に警告しなければならない。

しかし、我々はこれらに関して「見ざる、聞かざる、言わざる」になっていないだろうか？

天の至聖所から、第一天使、第二天使、第三天使の使命が生まれた。この三重の使命は人々に主に会う備えをさせる使命である。しかし、それは、一般キリスト教道徳のお話に変わりつつあるのではないだろうか。厳粛なさばきのこと、諸教会はバビロンとなったこと、獣一法王教の世界支配陰謀、日曜休業令のことを説く、恐怖を与える、警告はいらないと聞かされていないだろうか。我々はどこを見ているだろうか。

ヨセフとマリヤはエルサレムの過ぎ越しの祭の帰りに、旅と社交の楽しみに夢中になっていた間にイエスを見失って困惑した。いわゆる「アドベンチストの焦燥」に陥ったのだ。しかし、彼らは神殿にイエスを見出して喜んだ。

我々が目を向けなければならないのは、天の神殿だ。そうするとき、自分の立場、アイデンティティーがはっきりする。

「しかし、人々は、まだ主に会う準備ができていなかった。まだ、彼らのためになされねばならぬ準備の働きがあった。彼らは、まず光を受けて、天にある神の宮に心を向けねばならなかった。そして彼らが、そこで奉仕しておられる彼らの大祭司に、信仰によって従っていくときに、新しい義務が示されるのであった。もう一つの警告と教への使命が、教会に与えられるのであった」 大争闘下 140。



下記の1、花婿なるイエスに目を向けるときに、2のセブンスデー・アドベンチストこそ花嫁なる最後の真の教会であるという自覚が生まれる。そして3,4の敵を見極め、その戦略に目覚めるのである。イエスから目を離して、敵にばかり目を向けると危険である。恐れと、迷いと、妥協が生まれてくるであろう。

1. 見ざる、聞かざる、言わざる「花婿なる主イエス・キリスト」
2. 見ざる、聞かざる、言わざる「花嫁なる『女の残りの子ら』と預言されている最後の真の教会」
3. 見ざる、聞かざる、言わざる「龍、すなわちサタン」
4. 見ざる、聞かざる、言わざる「サタンの花嫁とも言うべき赤い獣に乗った大淫婦、迫害教会—偽預言者—、心霊術」



天の至聖所の仲保者



地上のサタンの代表者

「ヨハネは王の美しさをながめて、自分を忘れた。彼は尊厳な聖潔を見て、自分が無能力で無価値なことを感じた。彼は神を仰ぎ見ていたので、人をおそれることなく、天の使者として出て行く用意ができた。彼は王の王であられる神の前に低く腰をかがめていたので、地上の君主たちの面前に恐れることなくまっすぐに立つことができた」 1 希望 104。

雅歌書も、黙示録も、聖書全体もキリストと教会のつながりを結婚関係で描写している。キリストとこの地上のご自分の教会は、それほど密接な関係なのである。また、キリストの最愛の花嫁を奪おうとするサタンとの熾烈な戦いの記録も聖書に明記されている。

「結婚制度を回復する福音の目的—人類の保管にゆだねられたその他のあらゆる良い神の賜物と同じに、結婚も罪によってゆがめられたが、その純潔と美しさを回復するのが福音の目的である。旧約聖書においても新約聖書においても、結婚の関係は、キリストとその民、すなわちカルバリーの価を払って買いとり、贖われた者たちとの間のやさしく聖なる結合を表わすために用いられている。『主は言われる、背信の子らよ、帰れ。わたしはあなたがたの夫だからである』(エレ 3 : 14)。雅歌では、花嫁がこう言うのが聞かれる『わが愛する者はわたしのもの、わたしは彼のもの』そして彼女にとって『万人にぬきんで』た彼はご自分の選んだ者にこう言われる、『わが愛する者よ、あなたはことごとく美しく、少しのきずもない』(雅 2 : 16; 5 : 10; 4 : 7)。…

そこでパウロはこう言っているのである、『教会がキリストに仕えるように、妻もすべてのことにおいて、夫に仕えるべきである。夫たる者よ。キリストが教会を愛してそのためにご自身をささげられたように妻を愛しなさい。キリストがそうなさったのは、水で洗うことにより、ことばによって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、また、しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、清くて傷のない栄光の姿の教会を、ご自分に迎えるためである。それと同じく、夫も自分の妻を…愛さねばならない』(エペ 5 : 24-28) (祝福 79, 80) スタディーバイブル旧約 904。

花嫁が、真の夫である天の大祭司から目を離して、地上の大祭司に魅せられると彼女はアイデンティティー(独自性、帰属意識、存在感)を見失ってしまうことになる。セブンスデー・アドベンチストは、何百というキリスト教会の中からわざわざ残りの民として存在するようになった、特別な終末論的存在理由があるのである。「女の残りの子ら、すなわち神の戒めとイエスのあかしを守る」最後の真の教会という立場を失ってしまうと、大淫婦、バビロンとその娘、すなわち一般キリスト教会からは特別に区別された真のキリストの教会という意識は失われていく。

セブンスデー・アドベンチストは、雅歌書には、「わがはと、わが全き者はただひとり、彼女は母のひとり子、彼女を産んだ者の最愛の者だ」(雅歌 6:9)と描写されている。「これはひとり離れて住む民、もろもろの国民のうちに並ぶものはない」民数記 23:9。キリストの花嫁と自称するキリスト教会はたくさんある。しかし、セブンスデー・アドベンチストは、ただひとり、キリストの花嫁として選ばれた預言の教会である。

決して誤解していただきたくない点がある。明確に理解しておかなくてはならない点がある。それは、セブンスデー・アドベンチストが最後の真の教会だからといって、他教派の信者は救われないと言っているのではない。そのようなことは断じてない! 預言者は、今日多くの神の民がバビロンといわれる諸教会にいると言っている:

「バビロンを構成する諸教会は、靈的暗黒と神からの離反に陥っているにもかかわらず、その中にはまだ、真のキリスト者が数多くいる。この時代のための特別な使命をまだ悟っていない人々が多くいる」 大争闘下 92(321 頁も参照)。

反対にセブンスデー・アドベンチスト教会にいるからといって皆が救われるのではない。救いは個人的なものである。

「あらしが迫って来るとき、第三天使の使命を信じると公言していながら、真理に従うことによって清められていなかった多くの者が、その信仰(立場、英文)を棄てて反対の側に加わる」 大争闘下 378。

従って、組織された教会としては、セブンスデー・アドベンチストはキリストの最愛の、真の教会であるという自覚を持つと同時に、他教派、すなわち、カトリックは大淫婦、母なるバビロンで、その娘たちが一般キリスト教会であ

るとの認識をしっかりと持っておくべきである。また、そのバビロンに、光を求め、救われるべき神の民が多くいること、また、反対に最後の真の教会、セブンスデー・アドベンチストの中にいながら、信仰を捨てる者が多くいるという厳粛な靈感の警告をも認識しておくべきであろう。古代イスラエルについて次のように書かれている：

「イスラエルの人々が、最初にカナンに定住したとき、彼らは、神政政治の原則を認めた。そして、国家は、ヨシユアの指導のもとに繁栄した。しかし、人口の増加と他国との交渉がそれに変化をもたらした。人々は、隣接する異邦の風習を数多くとり入れ、彼ら自身の特異性と清い性質とを大部分犠牲にした。彼らは、徐々に、敬神の念を失い、神の選民であることを誇りとしなくなった。彼らは、異邦の諸王の外見の壮麗さに心をひかれ、自分たちの簡素なことにあき果てた」 あけほの下 265,266。

どうも、今日のわが教会は「認知症」にかかって、物忘れがひどくなり、自分の名前さえ思い出すのが面倒くさいという人が多くなっているのではないかと危惧される。端的に、なぜ自分はセブンスデー・アドベンチストでなければならないのかという理由を持っていないため、こんな長たらしい名前はやめて、もっと一般受けのする簡単な名前に変えようと言いつけているのである。

これもみな、我々のさきがけとなって至聖所に入っていかれたイエスを見失った結果であると思われる：

「聖所問題が、1844年の失望の秘密を解かぎであった。それは、互いに関連し調和する真理の全体系を明らかにし、神のみ手が大再臨運動を導いてきたことを示し、そして、神の民の立場と働きをはっきりさせて、今なすべきことを明らかにした」大争闘下 138。

上文によると、神の民の立場と働きをはっきりさせるのは、何だろうか？ 聖所問題だ！

「聖所と調査審判の問題は、神の民によってはっきりと理解されねばならない。すべての者は、自分たちの大なる大祭司キリストの立場と働きについて、自分で知っている必要がある。そうしなければ、この時代にあつて必要な信仰を働かせることも、神が彼らのために計画しておられる立場を占めることもできなくなる」大争闘下 222。

「神が彼らのために計画しておられる立場を占めることもできなくなる」という意味は、セブンスデー・アドベンチストという立場を失うということである。なぜ、今日、再臨信仰の土台である聖所の清めと調査審判に触れないのであろうか？

セブンスデー・アドベンチストという立場を与えるのは何であろうか？ 第七日安息日だろうか？ 安息日を守る教派はたくさんある。たとえば、ユダヤ教会、セブンスデー・バプテスト、チャーチ・オブ・ゴッド、御霊教会、等々...しかもその中にいくつも分裂した教会があり、安息日を守る教派は 30 くらいあると聞いたことがある。

セブンスデー・アドベンチストは、聖書の真理と証明されたものは、他教派から全部取り入れてできた教会であるが、他教派と関係なく神から与えられた唯一独特の真理は、聖所と調査審判の教理である。それくらいセブンスデー・アドベンチストであるなら誰でも知っていると言われるかもしれない。以前はそうであったが、しかし、世代が変わって今日は、それさえも言おうとしない、聞こうとしない、見ようとする、セブンスデー・アドベンチストが多いのはまことに残念である。

しかし、今回は更につつこんでみたい。よく私は十字架を掲げず、聖所のみを強調すると批判される。その論議は、律法と福音の関係と同じであろう。律法と福音が切り離せないように、十字架と聖所は切り離せない。十字架のキリストの死は、聖所の奉仕の一部である。キリストは小羊であり、小羊の血をもって聖所で奉仕する祭司であられる。キリストは①犠牲であり、②我々の祭司である。今日、十字架は説かれるが、我々の大祭司の働きはめったに説かれない。衣服が汚れるとランドリーに持って行く。罪によって汚れた我々を清めるのは、天のランドリーで働いておられるイエスさまであり、漂白剤は十字架で流された血である。聖所のみを強調し、十字架を片隅に追いやって主を愛さないなら、「のろわれよ」(1 コリント 16:22)である。

「天の住民にとっては、十字架こそ注目の大中心である。彼らは十字架を通して墮落した人間があがないを受け、神と一つにされることを知っている」TDG(This Day With God) 51。

「天の聖所はキリストの働きの中心そのものである...天の聖所における、人類のためのキリストのとり

なしは、十字架上の死と同様に、救いの計画にとって欠くことのできないものである」「そこにはカルバリーの十字架からの光が反映している」大争闘下 222。

十字架は永遠にわたって、「我々の科学であり、歌である」。今日、十字架の光は天の聖所から反映しているので、至聖所の「ほふられたと見える小羊」を仰ぎ見ることが特に重要である。**黙示録 5 章は調査審判の光景である。調査審判は至聖所においてなされる。**だから、預言者は聖所問題が「どんなにか重要であろう」「何よりも重要である」と言っているのである。

「そこにおいて我々は、贖罪の奥義について、もっとはっきりした理解を持つことができる」大争闘下 223。

贖罪の奥義のもっとはっきりした理解はどこにおいてなされるというのか。「そこにおいて」、つまり至聖所においてである。我々の十字架の理解は、一般キリスト諸教会のそれよりももっと深いはずである。セブンスデー・アドベンチストには、至聖所における最後のあがないの働きにおいて「互いに関連し調和する真理の全体系」(大争闘下 138)が明らかにされたのである。旧約の聖所の儀式に福音がぎっしりつまっている。あがないは、流された血(十字架の犠牲)だけによるのではなかった。注がれた血(全能者の仲保)によってあがないがなされたのである。

「日ごとの務めのうちで最も重要な部分は、個人個人のために行なわれた務めであった。悔い改めた罪人は供え物を幕屋の戸口にたずさえ、このいけにえに手を置いて罪を告白し、こうして象徴的にその罪を彼自身から無垢の犠牲の上に移し変えた。それから動物は、彼の手で殺された。祭司は、血を聖所に運んで、この罪人の犯した律法を入れた箱の前方にたれておぼりの前に注いだ。この儀式によって、罪は血によって象徴的に聖所に移された。血が聖所の中にたずさえられない場合もあった。そのときには、モーセがアロンの子らに命じて、「これは……あなたがたが会衆の罪を負(う)……ため、あなたがたに賜った物である」(レビ 10:17)と言ったように、祭司がその肉を食べなければならなかった。これらの儀式は、共に、悔い改めた者から聖所へと罪が移されることを象徴したものであった」あけぼの上 418,419。

日毎の奉仕で祭司が犠牲の血を至聖所の前の幕に注いであがないがなされたことがレビ記 4 章から 6 章に記されている。「こうして、祭司が彼らのためにあがないをするならば、彼らはゆるされる」レビ記 4:20。

「贖罪に関する重要な真理が、この年ごとの務めによって民に教えられた。1年間にわたって捧げられた罪祭によって、罪人に代わるものが受け入れられてきた。だが、いけにえの血が罪に対する完全な贖いを果たしたのではなかった。それは、ただ、罪が聖所に移される手段を提供したにすぎない。罪人は血を捧げることによって、律法の権威を認め、律法に違反した罪を告白し、世の罪を除くおかたへの信仰を表明した。だが、彼は律法の宣告から完全に解放されたのではなかった」あけぼの上 420。

あがないは「贖罪の犠牲と全能の仲保」によってなされるのである(大争闘下 221)。そして、至聖所の仲保の働きであがないが完成されるのである。罪の処理が完成するのである(大争闘下 217、397;国指下 196)。

あがないの日になって、民はすべての罪から清められ、あがなわれたのであった。

「この日にあなたがたのため、あなたがたを清めるために、あがないがなされ、あなたがたは主の前に、もろもろの罪が清められるからである」レビ記 16:30。

「こうして、新しい契約が完全に成就する『わたしは彼らの不義をゆるし、もはやその罪を思わない。』『主は言われる、その日その時には、イスラエルのとがを探しても見当らず、ユダの罪を探してもない』(エレミヤ書 31:34、50:20)。『その日、主の枝は麗しく栄え、地の産物はイスラエルの生き残った者の誇、また光栄となる。そして……シオンに残るもの、エルサレムにとどまる者、すべてエルサレムにあって、生命の書にしるされた者は聖なる者となえられる』(イザヤ書 4:2,3)」大争闘下 217。

「この働きが成し遂げられると、キリストの弟子たちは主の再臨を迎える準備ができるのである」大争闘下 140。

最後の教会は、「太陽のように輝き、月のように美しく」「清くて傷のない栄光の姿の教会」「旗を掲げた軍隊のようにおそろべき＝すばらしい、すてきな」状態になって花婿なるイエス・キリストを迎えることになる。(エペソ 5:27、雅歌 6:10、マラキ 3:4、大争闘下 140 参照)。アダムが罪を犯す前の罪なき状態(スタディバイブル新約 428)へと完全に罪から清められ、解放されて花婿に会うのである。

花嫁なる教会は、花婿キリストの品性を完全に再現して神のご品性を擁護することになっている。

「キリストは、ご自分の教会の中に、ご自身をあらわそうと熱望しておられる。キリストの品性がキリストの民の中に再現されたときに彼らをご自分のところに迎えるために、主は来られるのである」実物教訓 47。

人間が変えられるのは、眺めることによるという精神の法則がある：

「イエスの比類無き魅力ーキリストを見よ、彼のご品性の魅力ある美しさを見よ。そうすれば見ることによって、あなたは彼に似たものへと変えられていくであろう」スタディー・バイブル新 387。

「『これを造る者と、これに信頼する者とはみな、これに等しい者になる』(詩篇 115:8)ながめることによって変化するのは、人間の精神の法則である」あけほの上 89。

「キリストを見るということの意味は、み言葉のうちに彼の生涯を研究することである。我々は真理を隠された宝のように掘り下げるべきである。目をキリストに留めなければならない。彼を自分の個人的救い主とするとき、そのことが我々を恵みのみ座に大胆に行かせるのである。見ることによって我々は変えられ、品性において完全であられるお方に道徳的に同化するようになる。彼が与える義を受け入れることにより、聖霊の改変させる力を通して、我々は彼ようになる。キリストのみかたちを思い続けるとき、それは我々のすべてを魅了するのである(MS 148, 1897 年)」スタディーバイブル新約 388。

教会にとって花婿であるイエスから目を離すことは、由々しいことである。危険である。エバはアダムから目をはなしたので、サタンの誘惑に負けて人類を売り渡す結果になった。

旧約聖書は、イエスの妻として選ばれたイスラエルが、夫から目を離して不倫、姦淫に赴く様子を描写している。花婿、あるいはイエスから目を離して周囲の国々に目を向けてしまい、偶像礼拝に陥ってどれほど神を悲しませ、怒らせたか。

現代イスラエルも古代イスラエルと同じ道を歩んでいると、預言者は警告している。次の言葉に留意していただきたい：

「我々の歴史とイスラエルの歴史との間には著しい類似点がある」 4T17。

「あなた方は、古代イスラエルと同じ道をたどっている。神の特別な民としての聖なる召しから同じように落ちている」 5T75-76。

教会は、花婿なるイエスから目を離して、世俗を眺め続けると、感化されて同化することは免れない。今日の教会の背教の原因はどこにあるだろうか？「栄光の姿の教会」でなく、ラオデキヤ教会になってしまった原因はどこにあるのだろうか？ イエスを見失ったことにある。イエスから目を離してしまったからである。

教会に来ているから、信者であるから、イエスを信じているのだから、イエスを見失っていることはない異論を唱える人がいるだろう。教会はイエスを高く掲げているのではないかと言うであろう。他教派も「イエス、イエス、十字架、十字架」を唱えていることに変わりはない。

イエスを眺めるということは、イエスがおられるところに目を向けなければならない。使徒パウロはこう述べている：

「その幕の内に、イエスは、永遠にメルキゼデクに等しい大祭司として、わたしたちのためにさきがけと

なって、はいられたのである」ヘブル 6:20。

「さきがけ」ということは、後についてくる者がいるということである。我々がついていくのである。私たちのために十字架に掛かれたイエスは、復活し、昇天し、天の聖所に入られた。我々も天の聖所に入っていかなければならないということである。信仰と愛情によって入っていくのである。

「入っていく」「眺める」ということは、どういう意味であろうか。花婿キリストの大祭司としての働きと立場を理解することである。つまり、「天の聖所に関する真理と、救い主の務めの変化とを認め、信仰によって従う」ことである。(大争闘下144,145参照)。贖罪は十字架で終わったのではない。十字架で開始された働きを完成するために天の聖所に入られたのである(大争闘下 222)。

「大欺瞞者サタンは、贖罪の犠牲と全能の仲保者を明らかにする大真理から」「数え切れないほど多くの策略を考案出して」「人々の心をそらすことに」懸命になっている。なぜなら「万事がかかっている」真理だからである(大争闘下 221)。特に最後の仲保の働きを憎んでいる。

聖所までの経験—すなわち、クリスチャンになってだんだん清めを経験するということは一般キリスト教会でも教える。これを聖潔、聖化という。しかし、至聖所の経験—すなわち罪の除去、特別なあがない、完全に罪から清められて花婿イエスの再臨を迎えるという教えは、セブンスデー・アドベンチスト教会以外、どこにも見当たらない。

至聖所の働き、「最後のあがない」「特別なあがない」「特別な清め」は、他のキリスト教会から最も非難されている教理である。ところが、わが教会内でも他教派から影響を受けて、この大真理、現代の真理が無効にされつつある。

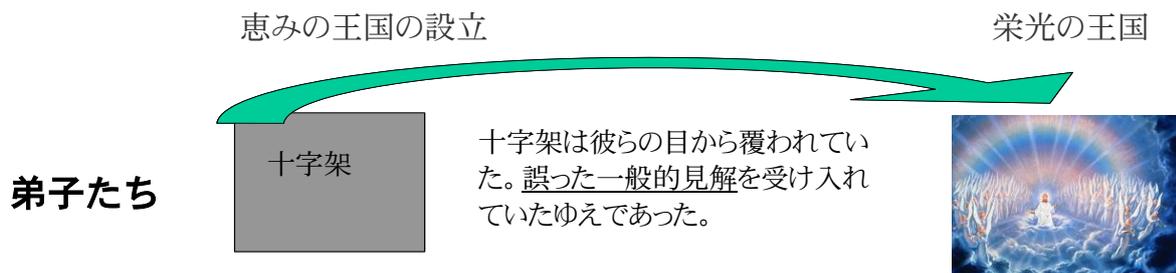
4 なぜ、我々はイエスを見失ったのだろうか？ 理由は三つあるように思われる。

1. 栄光の王国を期待し、恵みの王国の理解を失ったこと。
2. 世俗に目を向け、魅了されてしまったこと。
3. キリストの再臨の遅延。ちょうど、戦場から夫の帰りが遅くなったので、最後まで純愛を保てず忍耐を失って不倫に陥る妻のように、我々も世俗に傾いた。

●恵みの王国と栄光の王国の区別 (大争闘下 40)。

弟子たちは、預言の誤った一般的見解のゆえに、栄光の王国を期待して贖罪の犠牲、十字架を理解することができなくて大失望を経験した。ダニエル9:26の「62週の後メシアが断たれる」、つまり十字架にかかるということを見逃してしまっただけでなく、恵みの王国が設立されなければならないのに、彼らはキリストが王の王として来られるメシアを期待していたのである。

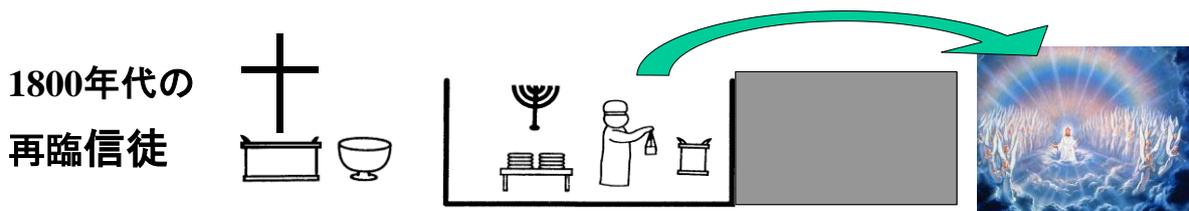
誤 り と 失 望



1840 年代の再臨信徒も同じような経験をした。

ダニエル書 8:14 の 2300 日のタイムラインの研究から、1844 年に再臨信徒は主イエスの再臨を期待していたが、大失望を経験した。彼らは、一般的な教会の誤りから「聖所」はこの地上と思い、イエスを見失ってしまった。大争闘下 138 頁にこう書いてある：

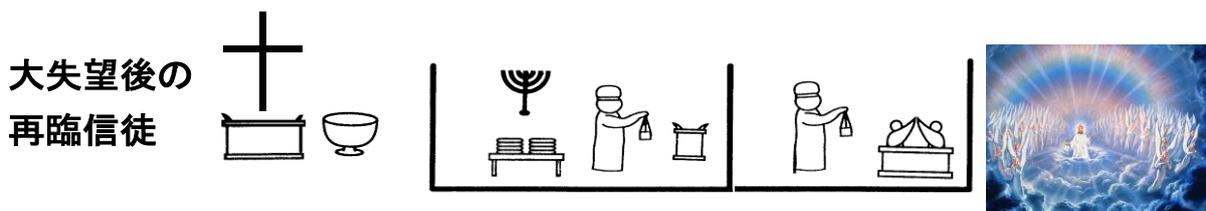
「その望みが失望に終わったとき、彼らはイエスを見失い、墓のそばのマリヤとともに、『だれかが、わたしの主を取り去りました。そして、どこに置いたのか、わからないのです』と叫んだのであった」大争闘下 138。



しかし、熱心な祈りと預言の研究によって、彼らは再び主を見出したのであった。どこに？ 至聖所の中に！ 栄光の王国、キリストの再臨に人々を備えさせるもう一つの準備の働き、すなわち、「最後の特別なあがない」、「特別な清め」をするために大祭司イエスを至聖所に見出したとき、当時の再臨信徒は、全世界に飛び立つエネルギーを与えられたのであった。初代文集 415 頁に次のように書かれている：

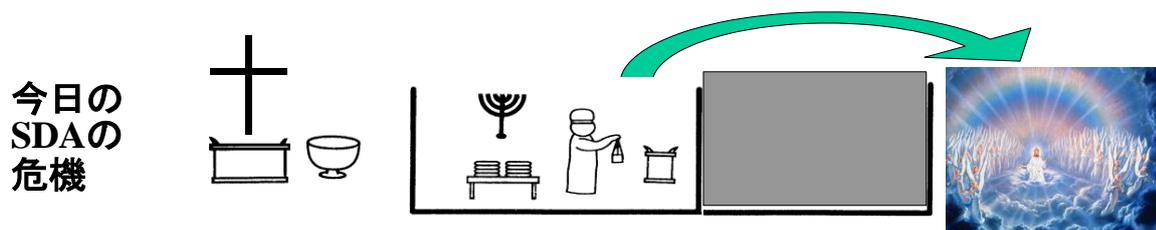
「わたしは、第三の天使が、上の方を指さして、失望した人々に、天の聖所の至聖所への道を示しているのを見た。信仰によって彼らが至聖所に入る時に、彼らはイエスを見出して、新たな希望と喜びを味わうのである。」

「彼らは、彼らの失望が解き明かされて、ふたたび喜びと確信に活気づけられた」初代文集 415。



1844 年から 160 年も経過した今日の教会はどうであろうか？

そもそも第三天使はどこに信徒を向けるのだろうか？ 至聖所である。今日、イエスは、さきがけとなってそこに入られたのだから、我々も至聖所に入るべきではないだろうか？ そこにイエスはおられるのである。しかるに、今日のセブンスデー・アドベンチストの教会で至聖所のこと、「最後のあがない」「特別なあがない」「特別な清め」が説かれ、聞かれるであろうか？ 前に引用した靈感の言葉によると、我々は再びイエスを見失った。至聖所に入っていない。



62 週の後メシヤが出現することは当たっていたが、弟子たちの誤りは、ダニエル9:26 の十字架を見落としてしまったことであった。1844 年の再臨信徒は、ダニエル 8:14 の 2300 日の時の計算は当たっていたが、事件を誤ってしまった。聖所についての理解が誤っていたのだ。今日我々は、どこかで誤っていないだろうか？ 彼らは預言のタイムラインと事件の解釈が誤っていた。

今日の教会はどうであろうか？ ダニエル書 12 章のタイムラインを誤って解釈していないだろうか？ それは過去のこと、すでに 1800 年代に成就したことだというのが今日、教会で聞かれる一般的誤りである。1260 日、1290 日、1335 日の預言は、教会が完全に清められたら、キリストの再臨まで約 3 年半という再臨信徒への慰めのメッセージである。我々は再臨に備える至聖所におけるイエスの「最後のあがない」「特別な清め」を見落としてしまっていないだろうか？

●セブンスデー・アドベンチストの誕生の原点に戻ってみよう。

主の僕は 大争闘下 140 に次のように言っている：

「しかし、人々は、まだ主に会う準備ができていなかった。まだ、彼らのためになされねばならぬ準備の働きがあった」大争闘下 140。

※「まだ主に会う準備ができていなかった」と言われている人々は誰のことか？ 初代文集を見ると、彼らは知っている限りすべての罪を告白して主を迎える準備に一生懸命であった。「その時、神の民は、神に受け入れられた。彼らの中には、イエスのお姿が反映されていたので、イエスは、喜びをもって彼らをごらんになった。彼らは、完全な犠牲と全的献身をしており、不死の姿に変えられることを期待していた」大争闘下 393。

彼らは、まず光を受けて、天にある神の宮に心を向けねばならなかった。そして彼らが、そこで奉仕しておられる彼らの大祭司に、信仰によって従っていく時に、新しい義務が示されるのであった。もう一つの警告と教えの使命が、教会に与えられるのであった。

※彼らは、至聖所のことを理解した時に悩みの時に備えて、仲保者がいなくて生きるためのもう一つの経験が必要であることがわかった。それは、どんなことであったのか。キリストに罪がなかったように、彼らもそのようになっていなければならない（大争闘下 397；初代 149）。

預言者は語っている。『その来る日には、だれが耐え得よう。そのあらわれる時には、だれが立ち得よう。彼は金をふきわける者の火のようであり、布さらしの灰汁のようである。彼は銀をふきわけて清める者のように座して、レビの子孫を清め、金銀のように彼らを清める。そして彼らは義をもって、ささげ物を主にささげる』（マラキ 3:2,3）。天の聖所におけるキリストのとりなしがやむ時地上に住んでいる人々は、聖なる神の前で、仲保者なしに立たなければならぬ。彼らの着物は汚れがなく、彼らの品性は、血をそそがれて罪から清まっていなければならない。キリストの恵みと、彼ら自身の熱心な努力とによって、彼らは悪との戦いの勝利者とならなければならない。天で調査審判が行われ、悔い改めた罪人の罪が聖所から除かれているその間に、地上の神の民の間では、清めの特別な働き、すなわち罪の除去が行われなければならない。この働きは、黙示録 14 章の使命の中にさらに明瞭に示されている。

●黙示録 14 章には純潔な傷のない 144,000 のことが記されている。

この働きが成し遂げられると、キリストの弟子たちは、主の再臨を迎える準備ができるのである。「その時ユダとエルサレムとのささげ物は、昔の日のように、また先の年のように主に喜ばれる」（マラキ 3:4）。その時、主が再臨されてご自分のもとに受け入れられる教会は、『しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、……栄光の姿の教会』である（エペソ 5:27）。また、その教会は、『しののめのように見え、月のように美しく、太陽のように輝き、恐るべき事、旗を立てた軍勢のような者』である（雅歌 6:10）」大争闘下 140-141。

サタンは、この大真理に盲目になるようにセブンスデー・アドベンチストに働いている!!! なぜなら、「この大真理に万事がかかっているからである」（大争闘下 221）。後の雨も、神の民の品性完成も、福音伝道も、神のご品性擁護も、花婿キリストを迎えることも....万事がかかっているのである。

この経験は、我々が今持っておらず、死なないで生きて主を迎えるには持たなければならない不可欠な「もう一つの経験」なのである。(大争闘下396;初文 148 参照)

では、死んで主を迎える聖徒たちは、この経験をしないとすれば、どのように天に移される手続きがなされるのであろうか。キリストの再臨を待ち望んで眠りについていく聖徒たちは、キリストを信じるからといってそのまま復活して天に移されるのであろうか？ 否、否、否である!!! 彼らも死んで後もう一つの特別な手続きが必要である。それが分かると、死なないで生きて主を迎える人の経験が良く分かる。

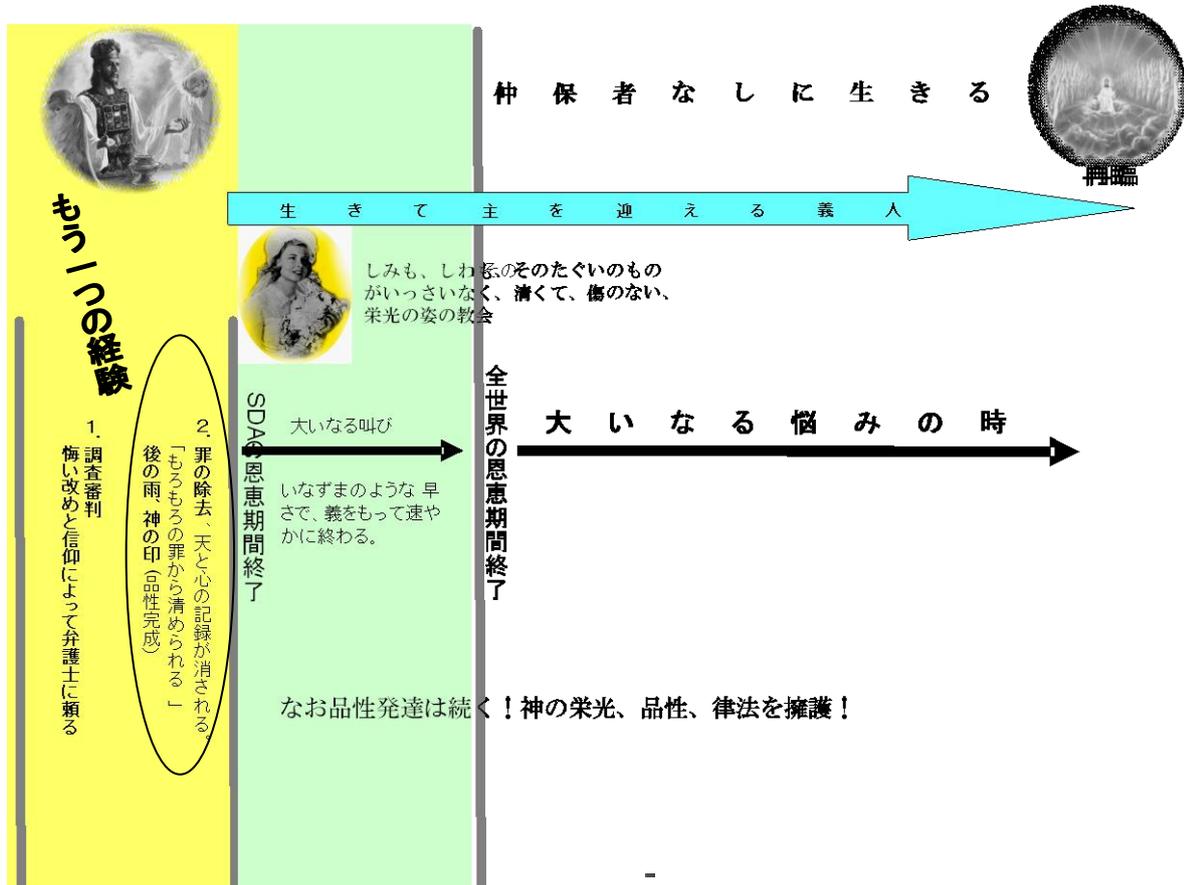
罪のゆるし、罪からの清め、罪の除去は、花婿キリストご自身のためになされなければならないことなのだ。

「わたしこそ、わたし自身のためにあなたのとがを消す者である。わたしは、あなたの罪を心にとめない」イザヤ 43:25。

御子キリストのためにつくられたのだから、花婿キリストのために我々は救われなければならないのだ！ キリストのために完全にならなければならないのだ！ キリストのために天国にいかななければならないのだ！

これほど重要な大真理を「見ざる、聞かざる、言わざる」で見過ごしていいだろうか。見て仰いで生きよう。聞いて悟ろう。行って伝えて希望を与えよう。この大真理を！

人間が罪を犯すと天の宮において、また神の宮である我々にどんなことが起こるのか。罪性とは何か。罪性はどのように処理されるのか。罪と、その記録はどのように処理されるのか。生きている聖徒たちは、生きている間に罪の除去を経験する。キリストにある死者は再臨の時に罪が除去されないとすれば、いつ天国に移される手続きがなされるのであろうか、詳しい考察は次回にまわすことにする。



- アダムが罪を犯す前は、仲保者を必要としなかった。
- イエスに罪がなかったので、仲保者を必要としなかった。
- 生きて主を迎える 144,000 は、罪がないので仲保者を必要としない。

エゼキエル 36:23 わたしは諸国民の中で汚されたもの、すなわち、あなたがたが彼らの中で汚した、わが大いなる名の聖なることを示す。わたしがあなたがたによって、彼らの目の前に、わたしの聖なることを示す時、諸国民はわたしが主であることを悟ると、主なる神は言われる。

わたしがすることはあなたがたのためではない。それはあなたがたが行った諸国民の中で汚した、わが聖なる名のためである。

宣教師がヨブのような苦境から学んだ大教訓。保険社会が神への信頼を希薄にする危険！

神の居住区で生活する

オットー・コーニング

砂川満 訳

私たちが学ばねばならない人生の大切な教訓は、しばしば困難な状況において会得されます。困難な苦しい状況においてこそ、私たちは教訓を最大限に学び取るようであります。

伝道地から帰っても更なる試練

私たち家族が、伝道地(パプアニューギニア)から帰国した頃の事です。妻のキャロルは肝臓の病気を抱えていました。伝道地における最後の一年間、彼女の病気は悪くなる一方だったので、とうとう家族全員で帰国しなければならなくなったのです。

帰国するや否や、他にも問題がいくつも出てきました。帰国した時の私たちの持ち物と言えば、各自のスーツケースだけでした。四人の育ち盛りの子供がいながら、冬に着る服もなく、自動車も住む家もなく、着の身着のままも同然でした。カナダの出身教会からは、「ここは経済状態がひどいから、帰ってくるな」と言われました。家内の出身教会は閉鎖してしまい、彼女の両親もフロリダに引っ越したばかりでした。行く当てもなくなった私たちでしたが、結局オハイオ州のマンズフィールドに落ち着くことになりました。私たちはそのメンバーでも何でもありませんでしたが、マンズフィールドの教会の人たちが、親切にも私たちを受け入れてくれたのでした。

ところが、マンズフィールドに用意してもらった住宅は、理想的な住まいと呼ぶには無理がありました。備え付けの家具は、どれも古びていました。息子は座っているとき、椅子を後方に傾ける癖があったのですが、そうすると脚が外れて椅子から落ちてしまいました。いかにも、「宣教師邸」と呼ぶのにふさわしい住まいでした。長い間空き家になっていた家で、窓の老朽化がどれも著しく、子供たちが開け閉めすると、窓枠が壊れ、外れてしまう有様でした。網戸も、ことごとく落ちかかっていた。正真正銘の「宣教師邸」でした。私はこう思うんです。通常、不便な生活を強いられる未開の伝道地から祖国に戻ると、先進国の便利な生活を居心地良く感じますよね。ところが、いわゆる「宣教師邸」に住まわせれば、あまりのひどさに伝道地を懐かしむようになる。こうして、宣教師たちが伝道地に戻りたくなるようにもくろまれたのが、「宣教師邸」ではないかと。

さらに、私と入れ替わりで伝道地に赴こうとしていた別の宣教師仲間に、「僕の愛車を六百ドルで買ってくれないか」と頼まれました。お人好しの私は、その車を買う羽目になってしまいました。ただでも欲しくないほどの、オンボロ車でした。私の人生で、最悪の割に合わない買い物でした。あれはまさに、走る「騒音公害」でした。おまけに、いつ止まってしまうか分かりません。少しはいい事もありました。寄付集めに貢献してくれたんです。教会の前に駐車するときは、しばらくエンジンをかけっぱなしにしておきます。教会に来る人たちは、いやでもあの、今にも爆発しそうな音を聞かされるわけです。いつ壊れてしまうか分からない状態でした(実際にたびたび故障しました)。同情した人たちが(同情はしても、誰も同乗したがりません)、「修理代のたしにしてください」と言って、いくらか寄付してくれるのです。そのうち、家内も自動車が必要になりました。

教会員の一人が、「使っていない車があります」と言って、一台寄付してくれました。これもまた、最初の車に負けず劣らずのオンボロでした。私が教会に出かけるときは、調子の悪い方を運転して行きます。親切な教会の人たちは、車の調子が悪くなるたびに寄付金をくれましたが、全額を修理代にまわす余裕はありません。子供たちの衣類も買わなくてはなりません。私たちは本当にお金に困っていて、生活のあらゆる面で物質的に欠乏し、きゅうきゅうとした日々を送っ



ていました。おまけに家内は肝臓を患っていて、床に臥していることの多い日が続いていました。

子供たちが世俗化する悩み

私たちは物質的な欠乏に苦しんでいただけでなく、家族の問題も抱えていました。子供たちは、教会の学校に行かせていたのですが、長男が不良の友達とつきあうようになり、マリファナを吸って退学処分を受けてしまいました。親として、当然私は非常に心を痛めました。おまけに娘はチアリーダーのクラブに入って以来、とても反抗的になり、あからさまに家の食事にけちをつけるようになりました。貧しいながらも最善の食事を子供に食べさせようと努力している親に向かって、「マクドナルドの方がましだ」と言うのです。

第一に物質的な問題、第二に家族の問題、そして第三に健康の問題がのしかかってきていました。私自身も、様々なストレスが原因で、再び健康を損ないかけていました。帰宅するたびに、「あっちが壊れた・・・こっちが壊れた・・・お父さん何とかして」と言われます。私は、手が器用な方ではありません。専門家に修理を頼むお金もないので、しばしば途方にくれました。一方、教会では、「勝利のクリスチャン生活」といった集会を催していたりするわけです。家の外では調子のいい事を言っている、ひとたび我が家に戻ると、何もかもうまくいっていない現実が待っています。家に帰りたくなくて、集会を長引かせたこともたびたびありました。病気がちの妻、反抗的な子供たち、倒壊しかかった住宅。無論、現実から逃避するわけにはいきません。でも家にいたら、あれもこれもしなくてはならないので、落ち着いて祈ることもできません。そこで私は、一人で近くの公園へ行き、ベンチのそばで祈り、そこに座って聖書を読むことにしました。



ヨブの経験に励まされる

ある日私は、公園でヨブ記を読んでいた。読んでいるうちに、ある事にとっても驚きました。ヨブも、私と同じような問題を抱えていたことが分かったのです（本当は、私がヨブと似たような問題を抱えていたわけですが・・・）。第一に、ヨブはすべての持ち物を失いました。つまり、物質的な問題です。第二に、子供たちを失い、彼の妻は信仰を失いました。つまり、家族の問題です。第三に、彼はひどい腫れ物に襲われました。つまり、健康の問題です。自分がヨブと共通の問題を抱えていることを知った私は、さらに深くヨブ記を研究するようになりました。まず分かったのは、ヨブがサタンの標的になっていたということです。サタンはヨブが大嫌いでした。サタンは私も大いに嫌っていた、それはいい事なのだ、と思いました。

家内が病気になる頃、ニューギニアでの宣教活動はとてもうまくいっていました。あちらこちらの部族の原住民たちが、次から次へとキリスト教への改宗を表明し、どうしても国に帰りたくはなかったのです。ですから、家内が速やかにいやされるよう祈りました。しかし、どうやら神様は、別の計画をお持ちであったようです。家内の病気が良くならなかったため、帰国を余儀なくされたわけです。

ヨブの話に戻りますが、彼はとても裕福で、「東の人々のうちで最も大いなる者であった」と書かれています（ヨブ 1:3）。同じ節に、「その家畜は羊七千頭、らくだ三千頭、牛五百くびき、雌ろば五百頭」と書かれていますから、つまり物質的に最も裕福な人であったわけです。それだけでなく、神様もヨブのことを高く評価しておられました。彼は神の御前に「全く、かつ正しく、神を恐れ、悪に遠ざかる者」と評されています（ヨブ 1:8）。ヨブは敬虔なクリスチャンであり、家族にも恵まれ、おまけに非常な財産家であったという、三拍子そろった理想的な人物でした。彼ほどの財産家であれば、当然有名人であったはずですが。そのような人をやっつければ、皆の語り草になるであろうことを、サタンは知っていました。ですから皆さん、私たちは教会の指導者のために祈らねばなりません。時には、指導者でも倒れることがありますよね。大物をやっつけば、多大な影響を及ぼすようになることをサタンは知っているの、指導者層を特に激しく攻撃します。

ヨブはサタンの標的でした。あくまで私の想像ですが、ヨブの農園をいきめぐったサタンは、

膨大な数の家畜としもべたちを目の当たりにし、幸せそうな十人の子供たちを見て、嫉妬したのではないのでしょうか。「どうにかして、あいつの人生をめちゃめちゃにしたい！」と思ったのではないのでしょうか。しかしどういふわけか、サタンはヨブに手を出すことができませんでした。ヨブの回りにはくまなく、まがきが設けられていたからです（ヨブ 1:10 参照）。ヨブの持ち物はすべて守られており、彼の権威の下にあったすべてのものは祝福されたのでした。ヨブのしもべとして働いたり、彼の子供であったりすることは、大きな特権であり祝福であったはずで、なぜなら、ルカ 11 章の 21 節に、「強い人が十分に武装して自分の邸宅を守っている限り、その持ち物は安全である」と書かれているからです。強い人が自分の管轄区にいて目を光らせている限り、敵は手を出すことができません（マタイ 12:29 も参照）。人々を破滅させようとつねねらっているサタンと悪霊どもの立場を説明して、この聖句が述べられています。

この原則は、いかなる組織、命令系統にも当てはまります。軍隊であれ、会社であれ、学校のクラスであれ、家族であれ、指揮官がまがき〔垣〕を確保していれば、彼の管轄化にいるすべての者は安全なのです。サタンはそのまがき、すなわち権威構造を尊重しなければなりません。神様が設けられたまがきであるため、彼はそれをむやみに乗り越え、内部で暴れ回ることにはできないのです。パプア・ニューギニアで、私たちは鶏を五羽飼っていました。肥えた立派な雌鶏たちで、食料となる卵を産んでくれました。ところが、おなかをすかした野良犬たちが鶏を付け狙っているのです、私は頑丈な小屋を建て、鶏たちを守ることにしました。犬たちは、何とかして鶏を餌食にしたいくて、いつも小屋の周りをうろうろしていました。小屋のてっぺんによじ登ったり、穴を掘って下から侵入しようしたり、彼らも必死でした。この様子はちょうど、ヨブの農園を行きめぐっているサタンに似ているなと思いました。「ああ、どうにかして、あいつの家畜の一頭でも傷つけることができれば・・・」と言ってくやしがっていたのではないのでしょうか。ところが、ヨブ記の 1 章で、神様とサタンの会談が行われるまで、サタンはヨブに指一本も触れることができませんでした。この事が、私にとって大きな慰めになりました。まず、この事をあらゆる時代の人々に教えるために、ヨブ記が記されたとは私は考えています。神様のまがきが私たちの周りにある限り、サタンは私たちに危害を加えることができないのです。皆さんはその事を信じますか。これは全くの真実であります。



あの会談が行われたときに、神様の方から議論を仕掛けられます。「お前が地を歩きめぐっていたときに、わたしのしもべヨブを見たか？」と。これはあたかも、サタンの生傷に塩をすり込むようなものであったことでしょう。「ああ確かに見ましたよ。見ましたとも。でもそれは、あなたが彼の周りにまがきを設けられたからではありませんか」といった具合に反論しています。神様は、サタンがヨブを付け狙っていたことをご存知でした。そして、ヨブと彼の管理下にあるものを、ことごとく守っておられました。サタンからその事を指摘されたとき、神様は否定なさいませんでした。

聖書の他の箇所を見ても、神様がまがきを設けられることが分かります。例えばホセア書 1 章では、ホセアの妻の周りにいばらの垣が建てられました。またイザヤ書 5 章には、まがきを取り去られたブドウ畑のことが書かれています。いずれにしても、まがきというのは、神の保護の象徴であります。そのまがきを取り去ったら、ヨブは神を呪うであろう、というのがサタンの主張でした。「いや、そんなことはない」と神様は言われ、「いや、きっとそうなる」とサタンは言ったわけです。ついに、サタンからの挑戦状が受理され、神様はヨブに関するご自分の主張を証明することになりました。「見よ、彼のすべての所有物をあなたの手にかかせる。ただ彼の身に手をつけてはならない」（ヨブ 1:12）。神様から許可をもらった時のサタンの喜びようが、想像できますでしょうか。聖書のこの部分も、ある真理を示しています。

神様の許可なくして、サタンは私たちに指一本触れることができません。私はどこに行っても、「ヨブが神から受けた仕打ちを、私は受けたくない」と言う人に会います。ヨブに危害を加えたのは神様ではなく、サタンでした。神様がなさった事は、まがきを取り除いただけでした。ただ、そのためにサタンはヨブに危害を加えることができるようになりました。神様のまがきが除かれたら、サタンはその機会を決して逃しません。ヨブを破滅させるために、できる限りのことをし

ました。まがきがなければ、私たちも同様の目に会うことでしょう。ヨブの場合、まがきが部分的に取り去られたのか、それともある程度低くされたのか、それは皆さんの想像で構わないと思いますが、いずれにしても、ヨブの所有していたものがすべて、サタンの手にかかってしまいました。

一日のうちに、彼はほとんどのしもべたち、すべての家畜、そして十人の子供たちまでも失ってしまったのです。かつては東洋一の裕福な人物が、一日にして無一文になってしまいました。保険もかけていなかったの（当時、保険なんていう制度はなかったはずです）、本当にすべてを失ったのでした。子供たちも、全員死んでしまったのです。いっそのこと、妻もいなくなってしまうよかったのに、と思ったかどうかは別にしまして、残ったのは彼と妻の二人だけでした。ヨブの妻は、彼にいやみを言うだけでした。「神を呪って死になさい」と。何という棘のある言葉でしょう。彼女も子供たちと一緒に死んでしまったほうが良かったのに、と私なら考えたいと思います。しかし、ヨブの妻が悪態をついたのは無理もないことです。一日に十人の子供を葬って、正気を保つことのできる女性が果たしているのでしょうか。おまけに、夫の財産までなくなってしまう、全国一貧乏な女に成り下がったのですから。そう考えれば、彼女を責めることもできませんよね。

興味深いことに、ヨブの健康はまだ損なわれていませんでした。神様がお許しになる以上に、サタンは危害を加えることはできません。これは大事なポイントです。命に至る道に私たちを連れ戻すため、私たちが辛い試練にあうことを神様はお許しになるかもしれませんが、決して必要以上の苦しみに会わせることはありません。ですから、サタンを恐れる必要はないのです。私たちは、神様の囲いの中にいます。大切なのは、その中に留まることです。

さて、神様とサタンの二度目の会見が行われました。再び、神様の方から話しかけられます。「あなたは、わたしのしもべヨブのように全く、かつ正しく、神を恐れ、悪に遠ざかる者の世にないことを気づいたか。あなたは、わたしを勧めて、ゆえなく彼を滅ぼそうとしたが、彼はなお堅く保って、おのれを全うした」（ヨブ 2:3）。ヨブ記には、彼がどれほど高潔ですぐれた品性の持ち主であったかが、三度にわたって述べられています（1:1; 1:8; 2:3）。これまで地上に存在した人の中で、最も偉大なクリスチャンの一人であったと言えるでしょう。当然、あのような災いを受けるに値する人ではありませんでした。私たちにさらなる大切な教訓を与えるために、ヨブがさらに激しい試練にあうことを神様はお許しになりました。

サタンは反論して次のように言いました。「皮には皮をもっています。人は自分の命のために、その持っているすべての物をも与えます。しかしいま、あなたの手を伸べて、彼の骨と肉とを撃ってごらんください。彼は必ずあなたの顔に向かって、あなたをのろうでしょう」（2:5）。そこで神様は、彼の肉体に触れても良いが、生命を奪ってはならないと言われました。これはつまり、まがきがさらに除かれれば、サタンはさらにその人を傷つけることができるようになるということです。神様のまがきが少しでも残っている限り、サタンはその人の生命を奪うことはできません。どんなにヨブの肉体を傷つけても、彼を殺すことはできないことを、サタンは知っていました。神様もその事をご存知でした。しかしヨブは、もうじき自分は死んでしまうのではないかと思いました。友人たちも、彼はもう長くないだろうと考えました。彼の妻は、「神を呪って死になさい」と言います。ところがサタンは、自分ができる事には限界があることを知っています。なおも、すべてを支配しておられるのは神様だからであります。



ヨブは陶器の破片を取り、それで自分の体の腫物をかきながら、灰の中に座っていました（2:8）。その哀れな姿を想像してみてください。あれほどの絶望的な状況にありながら、彼は、「わたしは知る、わたしをあがなう者は生きておられる」（19:25）と告白したのです。何という信仰の持ち主でしょう。「たとえ彼が私を殺しても、なおも私は彼を信頼することでしょう」（13:15 欽定訳）。順境のときにも、逆境のときにも、神に対する彼の態度は変わることがありませんでした。これこそ、真の信仰であります。

苦しい時期に、公園のベンチにすわってヨブ記を読んでいた私は、自分の試練がヨブの試練に到底及ばないことを悟りました。それから、彼の周囲にはど

神が愛なら
なぜこんな
ことが!

ったのかを考えました。彼は品性において完全で、清い生活を送り、常に潔白な良心と正しい動機を持っていました。これらは自分自身との関係における特性でした。さらに実直かつ公正で、情け深く、豊かな愛情の持ち主でした。これらの特性は、他の人々との関係において際立っていましたが、神との関係においては、神を畏れ、こよなく敬愛していました。

さらに第四の関係がありまして、それはサタンとの正しい関係であります。それはサタンを憎むことなのですが、つまりヨブは、罪を非常に憎んでいました。ヨブは、これら四つの関係—自分自身、他の人々、神、サタンとの関係—を正しいものに保っていました。それが、あらゆる服従の本質であります。これら四つの関係を正しいものにすること、それが完全な服従であり、ヨブはそのような服従を生活において実践していました。そのような服従の故に、神様の祝福がヨブに臨み、まがきが設けられていました。ヨブの管轄の下においては、すべてが祝福され、繁栄しました。

その事を知った私は、悔悟の念に満たされました。これら四つの関係を正しく保つことがまがきを築いてくれるとしたら、私が苦境に立たされているのも無理はない、と思いました。もしも私が、これら四つの関係において清くて正しいことを示していたら、状況ははるかに好ましくなっていたはずで、私の動機は不純なもので、実直な生き方からは程遠いものでした。自分のオンボロ車を利用して、寄付集めをする姑息なやり方を反省させられました。また、時には平気で祈りを怠る自らの私生活を省み、神を畏れる思いに満たされたのでした。そして、私は自分が憎むべきほどに罪を憎んでいない、と思いました。公園にいた私は、罪を悔いてその場にひれ伏し、泣いて祈りました。「ああ神様、私の周りにはまがきがないのですね。私のせいで、妻と子供たちに保護の御手が及んでいないのですね。私の持ち物がごとく祝福されないのも、私に非があるからです」。けれども、かつてはこのように祈っていました。「神様、私がこれまであなたのためにしてきたことをお忘れですか？」と。無論、このような手に引かかる神様ではありません。今や、神様が私のことをどのように考えておられるかが分かってきました。

以来、毎朝のように公園にやってきては、自分の罪深さを悔い、泣いて祈りました。そして、これら四つの関係を修正しようと努めました。そうしたらすぐに、すべてがうまくいき始めたと言った皆さんに申し上げたいのですが、そうではありませんでした。修正の過程はとても遅く、ゆるやかなものでした。しかし、その年の秋には、私の長男が教会の伝道キャンプに参加し、その機会を通して回心し、以来、伝道者として生涯を主にささげる決心をしました。神様が、彼を変えてくださったのです。また、家で出される食事に文句を言っていた娘が、ある日突然、「この食事は体にいいのよね」と言うではありませんか。私は自分の耳を疑い、危うく、持っていたスプーンを落とすところでした。彼女は続けて、「チアリーダーをしていて、自分の健康管理のためには、我が家の食事が一番だと分かったの」と言いました。それだけではなく、子供たち全員の態度が変わってきたのです。ちょうどその頃、例のオンボロ車の代わりに、さらに良い自動車が与えられました。神様は、必要に応じてどんな自動車でも与えることができになります。さらに、借家ではありましたが、もっといい家に引っ越すこともできました。少しずつではありましたが、状況が変わってきました。その変化は、私にとって大きな祝福でした。

引越し先は、オハイオではなくミシガン州でした。ミシガン通りという大きな道路沿いでしたが、家の裏には小さな森がありました。実は、その森の向こうに、貧困者層の住むあまり好ましくない住宅地がありました。そこでは、麻薬やその他の犯罪が横行していました。警官とギャングの両方が常に出入りしている区域でした。ある日、私は末の息子チャールズと一緒に、地下室へと通じる階段の上に立っていました。

私たちは、ある物を修理しているところでした。ちょうどその時、私たちの家と例の住宅地の間にある森に雷が落ち、そこに設置されていた変圧器に稲光が当たったのです。その変圧器に当たった火の玉のような電光が、どちらの方に向かったと思いますか。反対側にいる邪悪な人たちのところへ行くべきですね。ところがその電光は、善良な伝道者の住まいを襲ったのです。電線をつたって文字通り火の玉が我が家にやってきて、家の壁にかかっていた電気メーターを爆発させてしまいました。レンガの壁には、大きな焦げ痕が残りました。配電盤も真っ黒に焼けてしまいま



た。その結果、家の中のすべての電球と、コンセントにつながっていたすべての電化製品が壊れてしまいました。どれも真っ黒焦げです。全く信じられないような光景でした。びっくり仰天した私と息子は、すぐに階段をかけ上り、被害状況を調べるためにメーターのところへ行きました。するとその時、再び雷が同じ所に落ちたのです。瞬時にして火の玉が再び襲ってきました。息子が、「お父さん、危ない！」と叫びました。ここには危険だと分かり、私はすぐにそこから逃げようと思いました。ところが爆発の衝撃に押されて（それはまるで巨人の平手打ちを食らったような衝撃でした）、気がついたら、私は裏庭に立っていました。家の中から外に吹き飛ばされたわけです。吹き飛ばされたというよりは、無理やり押し出されたと言う方が適切かもしれません。電光に襲われる前と同じ姿勢で立っていたのですから。

家の中から息子の叫び声が聞こえてきました。「お父さんが消えてしまった！」急いで家に入り、「チャールズ、お父さんは大丈夫だ。君は大丈夫か？」と尋ねました。息子は興奮した様子で、「お父さん、バスケットボールよりも大きい火の玉が、僕の足のすぐそばを通り過ぎて、地下室に下りて行ったよ」と言いました。地下の家族部屋では、二人の娘がソファに座っていました。娘たちの報告によると、火の玉は二人のすぐ前を通り過ぎて、部屋の隅にあったランプに当たったそうです。その時は、あまりの驚きと恐怖に、声も出なかったようです。私たちは、二度も続けて天災に見舞われたのでした。

その日の晩、私は寝室に入ってひざまずき、次のように祈りました。「神様、お話ししたいことがあります。あなたは二度も、恐ろしい火の玉を私たちに送られましたね。方向が間違っていたと思います。あれは、あそこの連中に向けられるべきものではありませんでしたか？」ところが神様から、「方向は正しかった」と言われたような印象を受けました。しかし、私も負けてはいません。「神様、おっしゃることが分かりません。私に何を伝えようとしておられるのですか？私はすべてを失いました。もうこれ以上、失うべきものはないはずですが」。しかし祈っている間に、神様からのメッセージがだんだん鮮やかになってきました。私は、正しい道からはずれていたのです。



皆さんも、道からはずれることがありますか。私たちをこよなく愛されるが故に、私たちを連れ戻すために、神様が何をなさるかご存知ですか。火の玉を送ることによって、私に触れ、私の目を覚まさせようとなさったのです。再び本心に立ち返った私は、先述した四つの関係のどれを損ねたかを悟りました。そして、まがきを取り去られていたことに気づいたのです。どうしてですか？それは、私自身がまがきの外にさ迷い出てしまったからでした。放蕩息子のようにまがきの外にさ迷い出てしまうと、様々な苦しみに遭うこととなります。サタンは私たちの弱みに付け込んで、その弱点から私たちを崩していこうとするのです。まさに、その事に気がつきました。

そしてさらに、突然ある事をも悟ったのです。神様は、私の物質的な領域、つまり A の領域に触れられました。ヨブも最初に物質的な財産を失いましたね。B の領域は？・・・家族です。ヨブは家族も失いました。そして C の領域が、健康です。神様は、私をご自身に立ち返らせるために、私の A の領域に触れられたのです。そう考えると、感謝の念が湧いてきました。「神様、被害が物質的なものだけであったことを感謝します」。我が子を取り去られるよりは、愛車を取られるほうがずっとましですよ。健康を失うよりは、家を失うほうがましです。

電光によって裏庭まで押し出されたにもかかわらず、かすり傷一つ負いませんでした。神様に向かって、「私の健康を守ってくださったのですね」と言いました。また、火の玉が子供たちのそばを通り過ぎたにもかかわらず、三人とも無事でした。「神様、私の子供たちも守ってくださったのですね。私の健康は損なわれず、家族も無事であったことを感謝いたします」と祈りました。確かに、家の中の電気系統はめちゃくちゃになり、電化製品の多くが壊れてしまいました。どれも、取り替えが可能なものばかりです。それから、こうも祈りました。「神様、私が正しい道からはずれたときには、いつでも私の所有物を取り去ってください」と。

自分自身の神との関係を修復

こうして私は、再び神様との正しい関係を回復することができました。そのために、主を讃え

たいと思います。これらの出来事を振り返って思うのは、神様は私たち一人ひとりをこよなく愛しておられるということです。神様ご自身も、私の他の領域に触れるよりは、私の所有物に触れるほうがましだと考えておられます。親が自分の子供を扱う場合も、同じではないでしょうか。道を誤っている我が子が立ち返ってくれるならば、叩いたり懲らしめたりして、少しでも痛い目にあわせるほうが良いと考えるはずです。神様の私たちに対する愛は、私たちが自分の子供に対して抱く愛情にまさっています。道を誤っている私たちを立ち返らせるために、できれば私たちの物質的な領域に少しでも触れて、私たちを懲らしたいと考えておられるのです。

主は、羊飼いに譬えられていますね。群れからはぐれた一頭の羊をも捜しに出かけていく、優しい羊飼いです。夜中に、いばらの茂みに引っかかって動けなくなった羊を見つけると、けがをしないように注意深く救出してやり、優しく抱きしめて家に連れ帰ります。愛情に富み、柔和で情け深い羊飼い—それが私たちの神様です。ところが、その羊が懲りずに何度も群れからはぐれようとするならば、羊飼いはどうすると思いますか。羊の脚の骨を折ってしまうのです。そして、骨折した脚が回復するまで、羊飼いはいつも自分のそばにその羊を横たわらせて介抱してやり、骨折が治るころには、羊飼いの声を聞き分けることができるようになっていて、決して群れからはぐれなくなります。神様も、もし私たちが懲りずに何度も道を誤るならば、やむを得ず脚の骨を折るかもしれません。つまり、健康または家族が損なわれるのをお許しになるかもしれないということです。

保険問題と信仰

もう一点だけ、私たちの国(米国)で問題になっていることについて申し上げたいと思います。それは、保険の問題であります。私たちは A の領域、つまり物質的な財産、所有物に保険をかけます。B の領域である家族、または C の領域である健康に保険をかけることはできません(健康保険、ガン保険、入院保険といった、健康に保険がかかっているように思われるものもありますが、実際は病気になってから、医療費の一部または全額を免除してもらえただけで、健康保険に加入したからといって、健康が保障されるわけではありません。生命保険、傷害保険などのたぐいも同様で、もしもの場合は、金銭という物で保障がなされるだけです。自分自身や家族の生命が保障されるわけではありません)。

この保険というのは世の制度であり、私たちはこの点で世に倣ってしまっているのです。世は神を信仰していません。それ故に、世の人々はできる限りの保険をかける必要があるわけです。しかし、神様を信じている私たちが世の人々に倣って保険に頼るとき、事実上、「神様、私の所有物に関しては、あなたに信頼を置くことができません」と言っていることになるのです。でも、それは間違っていますよね。神様はまがきを設けて、私たちが持つすべてのものを保障することがおできになります。私たちが A の領域を保険にかけると、私たちを正しい道に連れ戻すために、神様は B または C の領域に触れなければならなくなるのです。A の領域である所有物に触れたとしても、保険会社がすべて保障してくれるわけですから。つまり物質的なものに損傷を与えたとしても、新しい物に取り替えてもらえるので、懲らしめにはなりません。かえって、「ああ、保険をかけるといってよかった。実に賢明だった」と考えるようになるでしょう。そして、さらに深く保険にのめりこんでしまうことでしょうか。その結果、神様にますます頼らなくなり、ますます人間の制度に頼るようになります。これはまさに、霊的に道を踏み外した状態です。

私たちが主に頼ることを望んでおられる神様は、私たちを連れ戻すために、ほとんど仕方なく、B と C の領域に触れられるわけです。そして、こういったことが、今日のキリスト教会においてしばしば見られるのです。家族の問題、健康の問題を抱えた人があまりにも多いのではないのでしょうか。教会では、「〇〇さんが病気なので、皆で祈りましょう」といった要請はしばしば聞かれます。一方、〇〇さんの結婚関係が危機に陥っているとか、〇〇さんの子供が非行に走っているとか、〇〇さんはお金がなくて、明日の食事にも事欠いているといった問題は、秘される傾向にあります。週に一度、教会で顔を合わせるときは、誰もが笑顔を振りまいているかもしれません。

しかし実際は、多くの人が三つの領域の問題を抱えていて、保険のために、B と C の領域における問題はさらに深刻化しているのです。A すなわち物質の領域に保険をかけると、家族と健

康の領域において、私たちはきわめて無防備になってしまいます。そして、BとCも保険にかけることができるなら、きっとそうしていただろうと神様は解釈なさいます。たとえ口では言わなくても、「私は神なんか必要としていない」というメッセージが神様に送られるのです。今日、この保険制度は、教会の中で非常に大きな問題を引き起こしています。保険の分野において世と歩調を合わせるとき、私たちが霊的にどれほど無防備な状態に陥るかお分かりでしょうか。

この度は、「神の居住区で生活する」と題してメッセージを語らせていただきました。かつて、伝道地に派遣された宣教師たちは、宣教師の居住区というのを設けて、未開地における様々な危険をできるだけ未然に防ごうとしました。「神の居住区で生活する」というのは、神様が設けられたまがきに守られて生きることを意味します。「神の保護区」と言うこともできるでしょう。もし私たちが神の居住区に留まって、神のまがきという囲いの中に居ようと思うなら、私たちは世が提供する保険をことごとく避けるべきであります。これがきつい発言であることは承知していますが、少なくとも、保険は最低限に減らすべきであり、可能な限り避けるべきです。なぜなら、保険に頼ることは、神の居住区から出て生活することを意味するからです。神様がそれをお喜びになるはずはなく、迷い出た私たちを連れ戻すために、別の領域における損失をお許しになるかもしれません。私たちがこよなく愛しておられるからです。



但し、場合によっては、絶対に加入しなくてはならないたぐいの保険があるのも事実です。法律で義務づけられている保険もあれば、仕事の関係上、加入しなくてはならない保険もあります。私たちは、上に立つ権威に従うべきですから、そのような場合は謹んでそれを受け入れ、神様に感謝しましょう。しかしながら、自分から進んで加入すべきではありません。自分で保険のほうを選ぶべきではありません。そのような態度をとるときに、神様はやむを得ず私たちを懲らすことでしょう。どうぞ私の言葉を鵜呑みにしないで、ご自分で確かめてみてください。家族の問題や健康の問題をほとんど抱えていない人たちを探してみてください。そのような人たちが、どれだけの保険に加入しているか調べてみてください。また、家族の問題や健康の問題を多く抱えている人たちも探してみてください。そして、彼らがどれだけの保険に加入しているか、上手に尋ねてみてください。きっと皆さんは、その調査結果に驚かれることでしょう。

今回のメッセージは受け入れ難いと感じる人には、詩篇 91 篇を憶えていただきたいと思います。

「いと高き者のもとにある隠れ場(これは神の居住区です)に住む人、全能者の陰にやどる人は、主に言うであろう、『わが避け所、わが城、わが信頼しまつるわが神』と。主はあなたを狩人のわなと、恐ろしい疫病から助け出されるからである。主はその羽をもって、あなたをおおわれる。あなたはその翼の下に避け所を得るであろう。そのまことは大盾、また小盾である(ヨブの悩みと関連づけて読むことができますか?)。あなたは夜の恐ろしい物をも、昼に飛んでくる矢をも恐れることはない。また暗闇に歩きまわる疫病をも、真昼に荒らす滅びをも恐れることはない。・・・あなたは主を避け所とし、いと高き者をすまいとしたので、災いはあなたに臨まず、悩みはあなたの天幕に近づくことはない。これは主があなたのために天使たちに命じて、あなたの歩むすべての道であなたを守らせられるからである(これがまがきです)。彼らはその手で、あなたをささえ、石に足を打ちつけることのないようにする。・・・彼はわたしを愛して離れないゆえに、わたしは彼を助けよう。彼はわが名を知るゆえに、わたしは彼を守る。彼がわたしを呼ぶとき、わたしは彼に答える。わたしは彼の悩みのときに、共にいて、彼を救い、彼に光栄を与えよう。わたしは長寿をもって彼を満ちたらしめ、わが救いを彼に示すであろう」。

どうぞ、この章を憶えてください。そうするとき、「神の居住区で生活する」とはどのようなことが分かってくるはずです。

証

“翻って生きよ”

H.E.

はじめに

皆さんは奇跡が信じられますか。聖書の中には奇跡の話がたくさん出てきます。子供たちはライオンの穴に入れられたダニエルの話が好きです。奇跡的な癒しや死者のよみがえりの話も出てきます。迫害する者から迫害される者への転向というパウロの劇的な変化も奇跡と言えるでしょう。そして最大の奇跡はイエス様の復活です。ただし、これらの話を寓話、あるいは何かのたとえ話と捉えるなら、私たちは本当のクリスチャンとは言えないのです。聖書学者たちの中には奇跡を信じられない可哀想な人たちが大勢います。頭はいいのに肝心なところが信じられないために、知識はあるのに信仰がないために、救われないのです。これほどみじめなことがあるのでしょうか。実は、同じ問題を、クリスチャンと自称する私たちが抱えているのです。

病気になって



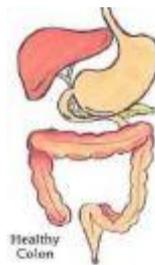
私は昨年8月1日に胃炎を発症して以来、苦しみ続け、文字通りのたうちまわる苦しみを経て、12月のある週末に入院しました。当時の主治医は私が急患で運ばれたというのに入院をいやがりました。

彼のみたてでは入院するような病気ではなかったのです。でも現実には大変な苦しみがあり、高熱も出ていたわけです。週明けには彼が大変な誤診をしていたことが明らかになり、彼の専門の泌尿器科から内科へと回され、晴れて内科病棟の入院患者となることができました。大腸全体に潰瘍が広がっていて、劇症の大腸炎でした。病気の全容は今もって分かりませんが、胃炎によってまともな消化ができなくなり、まずは下痢が始まりました。もちろん腹痛もあります。そのうち胃だけでなく下腹部の痛みも始まり、下痢は治まることがなく、体重は半年で10キロ減りました。もともと太りすぎて過去3年ぐらいいろいろなダイエットを試みては失

敗してきましたから、減量自体は喜ぶべきことなのですが、同時に著しく体力も減退していったように思います。

夏に胃炎になったときは内科医にたいしたことないからと言われ、秋に泌尿器科にかかったときも体の中で炎症が起きているのは事実だが、超音波で見るとはたいしたことないと言われ、まともな治療を受けないうまま、無理な生活を続けていたのです。週に1、2回は学生と激しいテニスをしていましたし、何度も出張しました。医者からは、どこかに炎症こそあるが、消化管の中はきれいなものだ、などととんでもない間違っただけを言われていい気になっていたもので、食事に気をつけることもなく、脂っこいものや辛いものも特別避けることはしませんでした(もともとそんなに刺激物を食べていたわけではないので)。これが病気の進行に拍車をかけたのだと思います。

二度目の入院



最初の入院は12月中旬からの2週間。この時は感染症を抗生物質で押さえ込みました。熱は下がったものの、下痢はおさまらず、腸の潰瘍もたいして良くなっていなかったようです。ですから退院後の最初の外来で、単なる感染性の腸炎ではなくクローン病だと告げられることになってしまいました。現代医学では完治させることができない病気であって、いわゆる難病なので国から医療費が補助されることを知りました。そうは言われても素直に受け入れることなどできず、これは難病と宣告されたすべての人に共通すると思いますが、すぐに治療を受けるよりも、本当に間違いなくその病気なのかもう少し経過を見守りたいと思いました。そこで、退院後はそれまで飲んでいた抗生物質をやめ、クローン病にいいからと処方してもらった薬もとらず、2週間ふつうの食生活で過ごしました。

その結果下痢がとまり、普通に近い便が出るようになったのです。まだ腹痛はありましたが、快方に向かっていくという実感がありました。忙しくてと言いつつ、予定していた検査を延期してもらっていました。

しかし主治医が心配して電話をくれたため、しぶしぶ検査を受けることになりました。(この時は主治医の先生の熱意に感動したのです!) どうもこれがいけなかったようです。小腸に潰瘍がないかどうかを見るためにバリウムを飲むのですが、これには下剤が入っています。せっかくとまっていた下痢が再発しました。その1週間後にはお尻から内視鏡を入れる検査をしました。これは下剤を飲んで腸の中を徹底的に空っぽにします。これで下痢に拍車がかかりました。検査の結果としては、小腸はそれほど悪くないが、大腸は12月の入院中からたいしてよくなっていない、すぐにも再入院して栄養療法で治療した方がよいというものでした。退院後の2週間で調子がよくなってきている実感があったので、この結果はショックでした。下痢が始まったのも検査のせいではないかと思いました。しかし実際には病気が進行してきているために下痢が再発した恐れもあるし、はっきりしたことは分からないので、もう一度入院することにしました。

病気の原因

クローン病は原因不明の難病で、口から肛門まで消化器のいたるところに潰瘍ができて、消化機能が奪われ、どんどん体重が減少していきます。特徴的な症状は下痢と腹痛です。痔は典型的な合併症です。私の場合はずっと口内炎、舌炎が出て、後に痔が出ました。腹痛はずっと治まることなく、夜、熟睡することは



はできませんでしたから、体力は落ちる一方でした。こういった病気になると「なぜ自分が?」と考えるものです。クリスチャンですから、この病気の背後にある神様の意図を見いだしたいと思うのです。

最初に考えたのは神様からの刑罰ではないかということでした。まっとうな信仰を持っていないのに教会ではまるで模範的信徒のように振る舞い、時々こうして講壇に立ち、あるいは礼拝の司会をしているわけです。そして数年前に西日本教区の理事に選ばれ、次は北アジア太平洋支部の理事に選ばれて韓国に2年間で4回行かせていただきました。そして昨年からは世界総会の理事に抜擢されたわけです。

選出の理由は、おそらく、表面上は問題のない信仰生活を送っているように見えることと、大学の教員をしていることでしょう。大学の先生というのは割合時間

に融通がききますから会社勤めや商売の方よりも休みが取りやすいわけです。昨年5月ぐらいに打診を受け、しばらく時間をいただいてから、最終的には承諾したものの、自分にはあまりにも恐れ多い役目で、こんな大役を今の信仰態度のままお受けしてしまったら、神様のお怒りにふれるのではないかと恐怖心がずっとつきまといました。10月に渡米したのですが、その間もずっと調子が悪かったのです。そして帰国後もどんどん調子が悪くなり入院へと至ったわけです。ですから最初は、この病気が刑罰として与えられたものではないかと考えたのです。

しかし神様は罪びとをいたぶって喜ばれる方でしょうか。聖書にはこう書いてあります。「イスラエルの家よ、あなたがたはどうして死んでよかろうか。わたしは何人の死をも喜ばないのであると、主なる神は言われる。それゆえ、あなたがたは翻って生きよ」エゼキエル 18:31 下-32。

神様のご品性を人間の姿で示してくださったのがイエス様です。イエス様の数々の癒しの奇跡を読めば、私が苦しんでいる姿を見て神様が喜んでおられるとは到底考えられません。イエス様は安息日に癒しの行為をするという、役人たちの神経を逆なでする危険を犯してまでもベテスダの池のほとりで苦しみ続けるひとりの重病者をお癒しになりました。もともとはその人の罪の結果病気になって、自業自得であるにもかかわらずイエス様はやさしく顧みてくださったのです。

「ごらん、あなたはよくなった。もう罪を犯してはいけない。何かもっと悪いことが、あなたの身に起るかも知れないから」ヨハネ 5:14。

ですから私の場合も、たとえ自業自得でこの病にかかったにしても、病気を単なる刑罰と考えるのは聖書的ではなく、むしろサタンが神様のご品性を誤解させようとしている罠であるのだと思いました。

最初は刑罰かと恐れましたが、やがて前向きに考えることができようになりました。神様は人生に起きるどんなできごととも私たちの益となるように導いてくださるのです。



「神は、神を愛する者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さることを、わたしたちは知っている(口語訳)」「神を愛する者たち、神の目的に応じて召された者たちのために、万事がともに働いて益となることを、わたしたちは知っている(KJV)」ローマ 8:28。

そんなわけで、この病の背後にも神様からのメッセージがあるはず。これまでの信仰生活を振り返っ



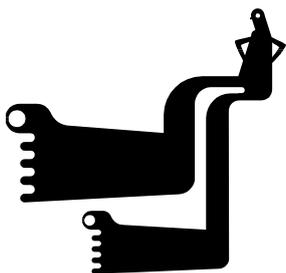
てみれば、反省すべき点が多くあることは明らかでしたから、自分を救い家族を救うために信仰態度を改めなさいということではないかと考えました。病気になればいやでも自由な時間ができますから、この点を改めるにはよい機会でした。祈り、聖書を学ぶ習慣がふたたび与えられました。そして、私が信仰生活をおろそかにしていたのは、仕事を優先していたからだと教えられました。怠惰であって、あまりにも時間の使い方が下手なために、安息日の準備のために他の6日間を使うことができず、金曜日の夕方になっても平安をもって安息日を迎えることができませんでした。教会では通訳もしていますから、金曜日の夜遅くまで通訳のために原稿に目を通したり説教のビデオを見たりしていましたので、全然安息ではなかったわけです。本来ならこうしたことは金曜日の昼間までに終わっていなければならぬことです。こういう休みのない生活を続けて体によいわけがありません。そして安息日をおろそかにして救われるわけがありません。安息日を軽視していること自体が救いを自分のものにしていないことを示しているのですから。

これまでの信仰態度を悔い改めて祈ることによって罪悪感から解放されました。あとは神様の癒しを待つだけでした。

どうやって癒されたか

私の治療計画というのはいたってシンプルなもの、栄養剤と薬を飲むというものでした。腸を休ませないといけないため、たとえばタンパク質はアミノ酸まで分解された形で摂ります。繊維質は腸の蠕動運動を刺激するので食べてはいけません。ですからそういう特殊な栄養剤で必要なカロリーを確保し、食事は一切できません。この栄養剤は高カロリーなので、一気に飲むと下痢をします。ちびちび飲み続けるのは結構困難です。そこで、夜間に鼻からチューブを通してポンプで注入するわけです。夜間の注入と昼間飲むのを4:3の割合で続け、1日3回決められた薬を飲み続けるというのが治療計画でした。それでも仕事があるので、朝検温がすんだら出勤し、夜病院に戻って栄養剤を注入するという生活になりました。

ところが2週間程度で退院の目途が立つはずが、全然よくなる兆候がないのです。入院から1週間しても下痢はおさまらず、痔の痛みはひどくなる一方で、たまった膿を出すことができず、せきをするたびに全身に激痛が走るありさまでした。2週目に入ると合併症で関節炎が出て、それがひどくなり足首はパンパンに腫れて歩けなくなりました。医者からは別の薬を併



用したいといわれました。

しかしこうなるまで漫然と過ごしていたわけではありません。病気のことを一生懸命勉強しました。いろんな方から有益な情報や健康食品をいただきました。あれもこれも次々と試してみましたが、治ることはありませんでした。しかし、それはこれらのものが無駄であったということにはなりません。私の病気をもっとひどくなるのをある程度防いでくれたと信じています。

家内も図書館から次々と本を借りて持ってきてくれました。驚くことに、その本がいい本ばかりで、とても役に立つのです。最初はクローン病の理解から始まり、適した食事のこと、現段階で確立されている一般的治療法や専門病院など。そして免疫力を高めるための方法など。順を追って私の理解が深まるよう配慮されているかのように、その時々に必要な本が与えられました。やがて、私のような難病の原因が冷たい物中毒や口呼吸にあること、そして低体温が免疫力を低下させることを知りました。冷たい水を飲むのをやめました。水は日田天領水がよいというので、高いですが、これを購入して、温めて飲みました。腸の毒素を出すためにチャコールをお湯にといて飲むことも日課になりました。カイロをお腹にあてて寝るようにしました。

あの手この手でやっているにも関わらず、痔と関節炎といった合併症がどんどん悪くなるので、最後の賭けに出ざるを得なくなりました。薬をやめることです。実は家内が持ってくる本はやがて代替医療にテーマが移っていて、薬をやめた方が病気がよくなる場合もあると書いてあり、そういった病気のひとつがクローン病だったのです。消炎鎮痛剤が交感神経を刺激して好中球という白血球を増やし、これが体の各部に炎症を起こすというのです。だから対症療法で炎症を抑える働きかけをしながら、実は一方で炎症を引き起こす原因を作り出し、永久に治らないというわけです。消防士が火事の現場で水とガソリンを混ぜて吹き付けているようなものですね。だからクローン病が難病で完治できないというのは、実は薬のせいだというのです。つまり、栄養剤を使って腸をしっかり休ませることで本来は回復するはずなのに、薬を使うためにかえって治らなくしているというのです。複数の著名な医者がこのようなことを書いているのです。もはやこれを信じるしかありませんでした。

入院患者が薬を拒否するというのは非常に勇気がいるものですが、主治医の理解が得られるように祈り、そして自分の希望を伝えました。医者は薬を信じて疑わないからこそ処方するわけですから、理解を得るのは難しいのですが、何とか同意を取り付け、薬とおさらばしました。そして爪もみによる副交感神経刺激も1日2回朝晩きちんとやることにしました。

結果は劇的でした。それまで日増しに悪化していたのに、薬をやめて3日目に何とか立てるようになったの

です。月曜日に薬をやめて、その週の土曜の晩は上司の退職祝賀会でしたが、車椅子なしで、自分で車を運転して出席することができました。まだ脚に痛みはありましたし、ゆっくり歩くのがやっとでしたが、とにかく日に日に回復していくのがわかりました。薬をやめてから1週間後の血液検査では白血球のバランスが改善していることがわかりました。炎症反応も低くなりました。そして入院してから5週間後、薬をやめて3週間後に退院することができました。

癒しの秘密

こうして振り返ってみると何でもないことのように見えるかもしれませんが。しかし私はそうは思いません。実に多くの方に祈っていただいたからこそ、こんな私でも神様は顧みてくださったのだと思います。家内がその時々に必要な本を見つけることができたのも神様のお働きです。私がかじけそうなときに支えられたのも、多くの方の祈りと、そして電話、手紙、お見舞いでの励ましによるものです。薬をやめることに関して医師の理解が得られたのも皆さんのお祈りあってこそです。多くの方の祈りによって、必要な知恵と勇気とが与えられましたし、物質的な援助もいただくことができたのです。



イエス様は病を癒されたあとで「もう罪をおかさないように」と言われました。私も薬をやめるだけでは不十分であって、自分を病気にした悪習慣から脱却しなければなりません。ですから今でも入院中に学んだことを生かしています。

私の病気は完治しないことになっています。だから難病に指定されているわけです。実は自分でもまだ完治していないことは分かっています。しかし、薬を飲まず、今では栄養剤も使わず、普通の食事の生活をしていて、それでも血液検査の結果はきわめて良好とされています。クローン病で苦しんでいる人たちから見れば、これだけで十分に奇跡的でしょう。私の信仰の挑戦は、しかしそれで満足してしまうことではなく、本当に完治することです。なぜなら神様には不可能なことはないからです。

「人にはそれはできないが、神にはなんでもできないことはない」マタイ 19:26。

神様を信じればどんな病でも癒されるというものはありません。ただ、私の場合は、ここまで癒されたのだから、現代医学では不可能と言われるクローン病の

完治を信じて神様にすがり続けることが、神様の御旨にかなったことであると信じています。なぜ癒されたのか、これも本当のところは分かりません。しかしはっきり言えることは、この癒しを通して私の信仰が強められたことです。そしてもしかしたら私のために一生懸命に祈ってくださった方々(つまりみなさま)の信仰がますます強められるようにとこの癒しが与えられたのかもしれない。いや、きっとそうなのだと思います。

もっと大切なこと

しかし大局的に見れば病の癒しは一番大切なことではありません。何よりも大切なのは救われることです。天国に入ることですべてが報われるのですから。私たちにとって最も大きな奇跡とは、実は、自分の品性から罪が取り除かれて、天国に入るのにふさわしいものとされることではないでしょうか。神様を信じて歩めば歩むほど自分の欠点が見えてきますから、完全な人間になど到底なれないと、途中であきらめてしまいがちです。絶望的になるのは自分で良くなろうとしているからですね、きっと。私たちはイエス様が十字架の死から復活されたことを信じています。これほど大きな奇跡を信じているのですから、私たち罪びとから罪をことごとく消し去ることも神様には実は簡単におできになることも信じられるはずですよ。それを妨げているのは、実は、罪のない品性なんて無理だと考える私たちの信仰のなさなのではないでしょうか。信じないということは神様に期待しないということです。神様に本気で願わずにいて、救いに入ることができるでしょうか。

ウイリアム・ミラーたちの再臨運動からすでに1世紀半以上が過ぎました。どうして私たちはまだこの世にいますのでしょうか。なぜイエス様は来られないのでしょうか。それはきっと私たちがイエス様のお働きに協力していないからです。イエス様は今日の至聖所という部屋で信じる人から罪を取り除く働きをしておられます。それなのに私たちは生きたまま罪を完全に取り除かれるなんて、少なくとも罪深い自分にはあり得ないなど思っているのです。

「人にはそれはできないが、神にはなんでもできないことはない」マタイ 19:26。

神様がなさることを不可能だと決め付ける権利は私たち人間にはありません。ましてやクリスチャンと自称する私たちが神様の能力に限界を設けて、クリスチャンでい続けられるわけがありません。

むすび

神様を信じると品性を変えられます。今まで平気でやっていたことが実は罪なのじゃないかと気づき、できなくなります。正しいことをしたいと思うようになります。

そうして自分の内に起きた変化に驚き、感動してバプテスマへと導かれるのです。神様の癒しのわざを目の当たりにしたから、自分の内に神様の奇跡が働いていることを知ったからクリスチャンになったのです。自分の品性から罪の性質がひとつひとつ取り除かれていきます。なのに、多くの人はその最後の仕上げだけは不可能だと思っています。

昔の自分を振り返りつつ今を眺めれば、どれだけ自分が変えられたか、感謝と驚きで満たされるのに、それでも完全に罪を取り除くことは、少なくとも自分にはありえないと思ってしまうのです。それはちょうど私の病がここまで癒されながら、まだ少し残っている病のかけらを完全に取り除くのは不可能だと思うことに似ています。現代医学で完治は不可能とされていても、私は信仰によってこの不可能に挑戦し続けたいと思います。なぜなら癒してくださるのは神様だからです。

「人にはそれはできないが、神にはなんでもできないことはない」とイエス様が言われるのです。同じよう

に、私の品性からの罪の除去も霊的いやしの最後の仕上げです。多くの人が不可能だと思ってしまうから、癒しの働きがストップしてしまうのです。でも、これは神様のお働きです。無理だと決め付けてはいけません。ベテスダの池の病人の癒しについて、エレン・ホワイトは靈感を受けて次のように書きました。

「同じ信仰によって、われわれも霊的いやしを受けられる。・・・いやされたと感じるのを待つてはならない。キリストのみことばを信じなさい。そうすればみことばは実現する」各時代の希望(上)245-246。

霊的いやし、しかも中途半端でなく、完全ないやしを信じて、あきらめることなく、歩み続けたいと思います。ここまで癒していただいたのに、最後の仕上げを拒絶して滅びてよいでしょうか。神様は翻って生きよとおっしゃいます。私の内に、みなさまの内に、神様の大いなる働きが完成する日が来ることを祈り続けたいと思います。(おわり)

世界の動き

オーストラリア版「アンカー」2006年9月号より：

黙示録 13 章の獣(ローマ法王教)は、セブンスデー・アドベンチストのみが、現存する唯一のプロテスタントであることを明らかにしている。まもなく、セブンスデー・アドベンチストが唯一のテロリストであるとされるのは、時間の問題であろう。The Catholic Mirror, 2 Sep. 1893—ザ・カトリックミラー誌は次のように言っている：

「アドベンチストだけがキリスト教界のなかで、聖書を唯一の教師とし、聖書には第七日目から第一日に変更する根拠を見出し得ないとする唯一の団体である。…神の礼拝日を土曜日のみとして聖別する基本的原則は、神ご自身の命令であることは、旧約、新約聖書と調和していることが繰り返し、繰り返し述べられている。…そのことは、神の御子がこの地上におられる間、その教えと行いによって証明されている。…プロテスタントは、16世紀の幼児期からカトリックと同調して土曜日でなく、日曜日を安息日として守り続けている」

あるカトリック会議において二つの重要ポイントで全員一致した。

1. 法王ヨハネ・パウロ 2 世は、この地上の霊的案内者であり、監督であることを全員一致で賛成した。そして、
2. 世界的宗教一致運動に協力することを拒む宗教上の原理主義者たちは、沈黙させるべきである。彼らは、全く憎むべき危険な極端者として断交されなければならない

The Bible believers at Papal Conference Power of Prophecy, 2000, 3月号, Vol. 2000-02, p3

「100年以上前からローマによる挑戦はまだ残ったままである。カトリック教会が正しいか、セブンスデー・アドベンチストが正しいか、そのどちらかで、他の選択はゆるされない」とデトロイトニュース、1998年7月7日に法王、ヨハネ・パウロ 2 世は言った：

息抜きにこんな話を紹介しよう：

ローマ人の話 三羽の雄鶏

ゴルディアン帝の御代に、一人の軍人がいて、美しい妻を持っていた。ある時その軍人が旅に出かけると、妻はすぐに恋人を家に引き入れて楽しんでた。

そこには三羽の雄鶏がいて、夜中に男女が楽しみ戯れていると、一羽の雄鶏が鳴きだした。その家の女中は、鳥の言葉が分かったので、女主人は、これと呼んで、雄鶏が何と言っているかと尋ねた。

「あなたがひどく旦那さまを辱めていると言っています」と、女中が答えると、女主人は、すぐにその雄鶏を殺した。するとすぐにまた他の一羽が鳴きだした。女はまた女中にその意味を聞いた。

「『おれの友達は、真実を語って死んだ。おれもその覚悟があるぞ』と言っています」と女中が答えると、女主人はその雄鶏も殺してしまった。しばらくすると、三番目の雄鶏も鳴きだした。今度は何を言っているのかと尋ねると、女中は、「もし平和な暮らしを欲するならば、聞け、見よ、黙れ。と言っています」と答えた。

「おお、ではその雄鶏は殺さぬように」と女主人は言った。

※「わたしが悪人に向かって、悪人よ、あなたは必ず死ぬと言う時、あなたが悪人を戒めて、その道から離れさせるように語らなかつたら、悪人は自分の罪によって死ぬ。しかしわたしはその血を、あなたの手に求める。しかしあなたが悪人に、その道を離れるように戒めても、その悪人がその道を離れないなら、彼は自分の罪によって死ぬ。しかしあなたの命は救われる」 エゼキエル三三章八、九節。

三つの警告

ある男が、死神と契約をした。その内容は、「死神が、男を連れて行く前には、必ず三つの警告を示す。」というものだった。

それから何年も過ぎて、男は年老いて病気になる。するとそこへ死神が現れた。男は死神を見て叫んだ。

「おい、約束が違うではないか。お前は、俺を連れて行く前に、三つの警告を言ったはずだぞ。」すると死神が言った。

「ところで、君は、足腰が弱って歩けないのではないのかね」

「ああ、その通りだ」

「それが第一の警告だ」

「それから、君は、耳が遠くなっているのではないかね」

「ああ、その通りだ」

「それが第二の警告だ」

「そして君は、目がかすんでいるのではないかね」

「ああ、その通りだ」

「それが第三の警告だ。さあ、もう行く時間だ」

こうして死神は、男を連れて行った。

※「まことに主なる神はそのしもべである預言者にその隠れた事を示さないでは、何事もなされない」アモス書三章七節。

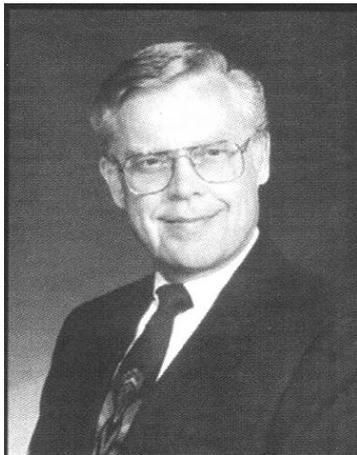
「人間は、神が憐れみのうちにお与えになった警告を拒否して無事ではあり得ない。ノアの時代に天からの使命が世に送られた。そして、彼らの救いは、彼らがその使命をどう受けにかかっていた」 大争闘下一四九。

お知らせ お知らせ

2007年 春期セミナー

終末時代の預言—ダニエル書と黙示録の新鮮な解釈

講師：フランクリン・ファウラー医師 (Franklin S. Fowler Jr. M.D.)



プロフィール:

セブンスデー・アドベンチストの内科医：米国マイヨークリニック(ミネソタにある世界最大級の医療センター)で研究。

ロマリンダ総合大学の健康科学の助教授。

クリスチャン・ヘリテージ財団の主事(15年)。世界的に働きを展開している。

“End Time Issues=終末問題”誌の主幹。

“Prophecy Research Initiative”預言の研究所の主導者。

彼の働きは、信徒の献金によって支えられている自給伝道であり、ダニエル、黙示録に関する本は17冊に及ぶ。彼は聖書と証の書に基づいてセブンスデー・アドベンチストの信仰の柱の擁護者である。

彼は「しばしば終末にかかわる預言のことで教会と論争することもあるが、彼は消極的な論争は避け、我々の関心事は神はそのみ言葉に何と言われるかであって、それだけが拠りどころである!!! 真理はわくわくさせるすばらしいもの!我々はそれに集中したい!」と言っている。

場所：サンライズミニストリー(今帰仁村)

日時：2007年 4月2日(月)～9日(月)

連絡先：Tel.(0980)56-2783 Fax.(0980)56-2881 e-mail sanchor@cosmos.ne.jp

内容:



終末時代のダニエル8章—12章

黙示録預言の解読の基礎!

- イエスの再臨がほんとうに近いとどうして分かるか?どれほど運命の日が接近しているか?
- 我々の預言の解釈に何か見落とししていることはないか?
- イスラムパワーの台頭は預言にあるか?
- ハバクク 2:3、ダニエル書に出てくる「定められた終りの時」とはどういう意味か?

- ダニエル 11:40～45 の預言はどのように展開されるだろうか？
- 黙示録とダニエル書がどれほど互いに補足しあっているか？
- 黙示録の七つの封印、七つのラツパに新たな光！
- 従来のセブンスデー・アドベンチストの初代教会から終末に適用する歴史的解釈を検証する。
- 時間が許す限り黙示録についての質疑応答も歓迎すること。

「我々は預言的歴史のどこにいるかを人々に示そうではないか....」 5 T716

「しかし、天に秘密をあらわすひとりの神がおられ、この方が終わりの日に起こることを...示されたのです」
ダニエル 2:28。

「多くの者は、自分を清め、自分を白くし、かつ練られるでしょう。しかし、悪い者は悪い事をおこない、ひとりも悟ることはないが、賢い者は悟るでしょう」 ダニエル 12:10。

「思慮の浅い者たちは、あかりは持っていたが、油を用意していなかった。しかし、思慮深い者たちは、自分たちのあかりと一緒に、入れものの中に油を用意していた」マタイ 25:3,4。

「わたしに呼び求めよ、そうすれば、わたしはあなたに答える。そしてあなたの知らない大きな隠されている事を、あなたに示す」 エレミヤ 33:3。

「神の事柄を知りたいと望む者に、神の御霊によって教えられない者たちには到底理解できない、隠された不思議なことを開かれるであろう。キリスト者に開かれる素晴らしいことに耳を傾ける者たちは、献身した、熱心な魂に神が与え得る事に強い印象を受けるであろう」 RH, 1891 ,3-10

「この世界の歴史の終末が近づくにつれて、ダニエルが記した預言はわれわれが住んでいる時代そのものに関するものであるから、特別に注意を払わなければならない。それとともに、新約聖書の最後の書の教えを結びつけなければならない。サタンは、ダニエル書とヨハネが書いた黙示録の預言的部分は、理解することができないと多くの人々に思い込ませている。しかし、これらの預言を研究する者には特別の祝福が与えられると、明らかに約束されているのである。終わりの時に封が開かれるダニエルの預言に関して、「賢い者は悟るでしょう」と語られたのである(同 12:10)。そして各時代にわたる神の民の指針として、キリストがそのしもべヨハネにお与えになった啓示については、「この預言の言葉を朗読する者と、これを聞いて、その中に書かれていることを守る者たちとは、さいわいである」との約束が与えられているのである(黙示録1:3)。

われわれは、ダニエル書と黙示録に明らかにされている国々の興亡から、単なる外見的、世俗の栄光がどんなに無価値なものであるかを学ばなければならない。今日においても世界にその比を見ないバビロンの権力と壮麗さのすべては、当時の人々にとっては実に堅固で永続的に見えたのであるが、なんと完全に過ぎ去ってしまったことであろう。それは、「草花のように過ぎ去った(ヤコブ 1:10)。同様にメド・ペルシャ王国も、ギリシャ王国もローマ王国も滅びた。そして神をその基としないものはみな滅びるのである。ただ神のみこころと結合し、神の品性をあらわすものだけが永続することができるのである。神の原則だけが、この世界における唯一の堅固なものなのである。諸国の歴史と来たるべき出来事についての啓示において、神のみこころがどのように達成されるかを研究することは、見えるものと見えないものの真の価値を評価し、人生の真の目的が何であるかを学ぶ助けとなる。こうして、現世の出来事を永遠の光に照らしてみる時に、われわれはダニエルと彼の仲間たちのように、真実で気高く、永続するもののために生きることであろう。そしてわれわれは、われわれの主、救い主の永遠に続く祝福された王国の原則を現世において学び、彼がおいでになる時には、彼とともにその国に入って、それを自分のものとする準備が整うのである」 国指下 157,158。

2006年の回顧



崎浜安一郎、崎浜佑紀、崎浜きみ子



司 亞尾牧師 右 榎方子 右 榎古子 右 榎二郎



今帰仁ライフスタイルセンター

健康教育・体質改善プログラム

クレンジング（体内浄化）プログラムを中心として、健康的な生活様式を学びたい方、ゆっくり療養をされたい方のための滞在型プログラムがあります。

健康相談

あなたの毎日の生活習慣で疑問な点、どのように改善したら良いかなどお気軽にお尋ねください。正しい生活習慣、食事療法、自然療法の方法等の相談。

自然療法

ハーブオイルを使った全身のマッサージ。温めることによって血行を良くしたり、痛みを和らげる温熱療法。水を使ったさまざまな水治療法を体験することができます。

健康講話

米国ロマリング大学の健康教育学を学んだ講師によるわかりやすい、すぐに実行できる心と体のための健康講話。

宿泊

自然の中でゆっくり身も心もリフレッシュされたい方。日常の忙しさから逃れて一人になるのも時には必要です。健康料理をいただきながら宿泊もすることができます。

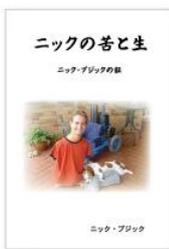
健康料理クッキングクラス

野菜や穀類、豆類を上手に使う健康的なお料理を学んでみませんか？ 高血圧や肥満、がん予防にお肉・お魚・卵・牛乳を一切使わない健康料理。

→地元の健康祭りでの、無料マッサージコーナーや小冊子の配布の様子。無料マッサージは好評で70名の方が体験した。



NEW 新刊書籍



ニックの苦と生 ニック・ブジックの証

オーストラリアのメルボーンで生まれたニックは、生まれながらに手も足もなかった。苦痛や苦闘に遭遇するとき、どのようにして喜ぶことができるだろうか？

価格：100円(税込)
発行：サンライズミニストリー



Man Born to Be King

人間の尊厳

ロバート・ブリンズミード 著

人間の崇高な起源、徹底的墮落、回復された人間は、キリスト共に支配し、「王と祭司」とされる！

価格：800円(税込)
発行：サンライズミニストリー

発行：サンライズ ミニストリー

〒905-0428 沖縄県国頭郡今帰仁村今泊 1471 電話：0980-56-2783 Fax：0980-56-2881

Email: sanchor@cosmos.ne.jp <http://www.cosmos.ne.jp/~sanchor/>

郵便振込み番号：02080-0-12121 サンライズミニストリー